

# ESD 実践研究 2019

---

ESD 推進ネットひょうご神戸  
神戸大学人間発達環境学研究科  
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

# ESD实践研究2019

---



## ごあいさつ ～Liberal Arts に還る～



野崎 隆一  
(ESD 推進ネットひょうご神戸代表)

2007 年以来、私たちの活動も今年で 12 年になります。神戸大学がハブになり、活動団体、企業、中高校などが、話し合い学び合う活動として続けてまいりました。今年も昨年につき、SDGs 研究をテーマとする実践研究集会を開催し、幅広い参加者を得て、多くの方々が有意義な議論を展開されました。また、年明けて開催した「国内 RCE 実務者会議」「日本 RCE ユース会議」では、全国の RCE 関係者との貴重な意見交換ができ、神戸で開催したことで、多くのメンバーが、他地区の多様な活動を知り、兵庫-神戸の特徴を認識できたことの意味は大きかったと感じました。2 年間にわたって SDGs を議論することで、これまで抽象的で掴みにくかった ESD の意味が、相対的に見えてきたように思います。

現在の制御不能な技術の進歩、地球温暖化、人口減少、格差の拡大など、先行きの不透明な社会にあって、ESD は社会を持続可能にするためにどのように考え、行動すれば良いのかを考える場でした。正しい答えが一つだけある訳ではないし、皆を満足させる答えがあるわけでもない。答えがすぐに出るわけではない、あるいは答えは複数かもしれない、あるいは答えはないのかもしれない。鷲田清一（哲学者）さんは、答えを性急に出そうとするのではなく、「答えがまだ出ていないという無呼吸の状態にできるだけ長く持ちこたえられるような知的耐久性を身につけること」が重要だと言っています。

私たちは、ややもするとすぐに役に立つ専門的な知識を求めがちですが、現代のような不確定で不透明な時代には、そのような知的耐久性を養う「教養（Liberal Arts=自由であるための技）」こそが求められているのではないだろうかと思最近思います。ESD 推進ネットひょうご神戸が、多様な活動分野、幅広い世代が集まって持続可能な社会について、これからも考え続けていく場でありたいと思います。

## 第 2 号発刊に寄せて～大学教育と ESD～

松岡 広路（神戸大学大学院人間発達環境学研究所  
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長）

### 持続可能な開発の実現に向けて変わろうとする大学

いのち・地球・くらしの持続不可性が 20 世紀後半から問題視されるようになり、同じく、大学においても、その教育と研究の質が鋭く問われつつある。事は自然科学領域にとどまらず、人文・社会科学領域においても、人間中心主義、生産力主義、近代主義の色濃い現代の学問のあり方を真剣に問い直し、ポスト近代（あるいはポスト近代のその後）を視野に入れたドラスティックな改革、すなわち、持続可能性を機軸・基盤とした学問への再編が求められるようになってきた。

世界に目を向けると、ESD カリキュラムは大学院課程に設置されることが多い。これは、研究と教育の一体的な関係のなかで持続可能な開発を実現することの重要性を鑑みてのことであろう。神戸大学でも、2010 年より人間発達環境学研究所においては「ESD Advanced Course」を設置し、持続可能な開発に求められる価値・態度をふまえた研究の発展を若手研究者が体得し得る場づくりが進められてきた。また、2020 年度より SDGs を推進する有為な人材育成をめざす「V. School」が、神戸大学本部事業として始められるにいたっている。大学が最先端の学問を探究する場である以上、SD を推進するために各学問領域の専門性を深化させ、優秀な人材を育成することは、大学の社会的責務である、といえるのかもしれない。

### ESD の仕掛け人を育てる大学教育

しかし、大学は、選ばれた人が専門を究め、その専門知によって社会に貢献するというだけのものではない。今世紀初頭より ESD（持続可能な開発のための教育）の実践に関わってきたが、そのなかで見えてきたのは、人々の多様な経験と英知およびそれらの葛藤こそが、世界を批判的にとらえ持続可能な社会を建設するエネルギーになるということである。大学は、権威・権力をもった人や特権化された専門家を育成する場というより、むしろ、社会における葛藤を社会創成のエネルギーに替える場にならなければならない。大学人・学生がひとり考えるのではなく、社会の多様な人々とともに考え・創り・苦勞するなかで ESD が発露するという見方が大切であろう。あらゆる人が持続可能な開発をめぐる力動（出会い・交流・葛藤・調和・分離・統合）のなかで、みな生き生きとした主体となるために、大学は何ができるかを考えなければならないということである。

### RCE・ESD 推進ネットひょうご神戸と神戸大学の連携による二つの試み

神戸大学では、こうした意図のもと、2006 年に学士課程（学部）に「神戸大学 ESD コース」を設け、同時に、神戸大学人間発達環境学研究所ヒューマン・コミュニティ創成研究センターが主宰する「ESD ボランティア推進プロジェクト」を開始した。

前者は、大学生が ESD の仕掛け人として成長すること、すなわち、多様な人々とともに SD を考え実践する主体になることを願い、大学のフォーマルなカリキュラムにフィールド学習を組み込んだものとなっている。ESD 推進ネットひょうご神戸が運営する「ESD スタディツアープログラム」は、多くの学生が「ほんものの活動」に触れる機会を提供してくれている。

また、後者は、ボランティア活動を基調としながら、いかに多様な人々と触れ、共に活動し、共に SD を考える場を作ることができるかを課題とする実践的事業である。ESD を実践化する上で欠かせない「異質との出会い・交流の場づくり」を、ユースを中心に自ら企画・運営し、ESD のモデルを提案することを目的とする。ワークキャンプ、ワークショップ、ボランティアワークを具体的な活動に置きつつ、インクルージョン（社会的包摂）を大切にしながら、持続不可能な状況を生み出しているわれわれのライフスタイルを、多様なつながりを意味する愛・Love のなかで変えていく方法について、みずから実践しつつ創出しようとするプロジェクトである。2019 年からは、それらの頭文字を取って、「ESD プラットフォーム WILL」という名称のもと、事業が進められている。これも、ESD 推進ネットひょうご神戸およびそのネットワークである RCE との連携・協力なくしては進まない。

#### **持続可能性尊重の思いを世代につないで発展させるには**

大学と RCE が連携することで、グローバルな枠組みのなかで ESD を展開する可能性が増す。ローカルな取組の面白さや意義を世界に広げていくこともできるであろう。この連携は、研究・教育・実践の相互的な変化を促す可能性をもっている。「当たり前とされていること」「われわれの常識」を批判的にとらえつつ、学問自体を解きほぐし、作り直していけるような「実践と研究と学び」の協働作業が生まれることを期待したいものである。

ESD によって大学教育が変わるか否か、大学教育によって社会に潜在する教育力に変化が生まれるか否か。まさにこれが問われている。多くの SD を希求する人々とともに、どうすれば、持続可能性を尊重したいという思いを、世代をつないで発展させられるかを考えていきたいものである。

## 目次

ごあいさつ～Liberal Arts に還る～	野崎 隆一	i
第2号発刊に寄せて～大学教育とESD～	松岡 広路	ii
目次		iv
<b>1. 第4回ESD実践研究集会を終えて</b>		
大会プログラム概要		1
ポスターセッションに見るSDGsの力強さとESDの課題	八木 純二	3
ポスター発表要旨		4
基調講演「SDGsと学びづくり」の概要	鴨谷 真	18
SDGs・ESD・人…様々な出会いの場としてのESDカフェ	木下 栞 宮本 貴生	23
分科会報告		
第1分科会：SDGsと人財育成 ～SDGsを拡める・実現するための人づくりの仕組みとは～	清野 未恵子	24
第2分科会：SDGsを推進する出会いの方法 ～ユースと多世代の交流をどう生かす？～	堤 拓也	25
第3分科会：市民社会とSDGs ～地域住民・企業・中学生の視点から持続可能な社会を考える～	高田 知紀	26
自由研究発表概要		
第1室	稲原 美苗	27
第2室	津田 英二	27
第3室	渡邊 一真	28
自由研究発表要旨		29
全体シンポジウム：私たちの提案～行動プランと大切なこと～	松岡 広路	38
リフレクションワークショップ	松岡 広路	40
リフレクション&オピニオン		
若者の参加を促す「ESD実践研究集会」に向けて	池田 拓也	43
多世代・多文化交流からユースがまんんだこと	福井 良子	44

関西で唯一の RCE としてシンボリックな研究会を まちづくりから SDGs を考える	西谷 寛 野崎 隆一	45 46
<b>2. 国内 RCE 実務者会議・日本 RCE ユース会議</b>		
実務者会議報告		
国内 RCE の交流によってアクティベートされる持続可能な社会づくりを担う人々	清野 未恵子	47
ユース会議報告		
日本 RCE ユース会議概要	堤 拓也	51
アンケート結果		53
ユースチームのリフレクション&オピニオン		
ユース会議の理想と現実		
～ESD の学びの場を自分たちでデザインするには～	堤 拓也	56
ESD 企画づくりワークショップにみる RCE ユースの課題と展望	後藤 聡美	58
私たちの手で社会をつくる	福田 百	60
多様性を受け容れ、共に生きる社会のあり方を考えた時間		
～くららベーカリーでのパン焼き体験から～	渡邊 久美子	62
RCE ユースのつながりを強めていくために	泉 史織	63
ファシリテーターを経験して見えたユースの可能性	小倉 未来	64
<b>3. 自由投稿：ESD と SDGs の関係を語る</b>		
<SDGs のための ESD> という潮流におけるエージェンシーの可能性	清野 未恵子	65
市民活動実践者の立場から ESD と SDGs を考える	西谷 寛	68
仮説と実践～それぞれの立場でより良い社会にするための努力～	西谷 真弓	71
ESD と SDGs との関係性とは	山村 けい子	74
執筆者一覧		76
おわりに～ESD を未来に引き継ぐ～	武田 義明	77



# 1. 第4回 ESD 実践研究集会

---

於：神戸大学鶴甲第二キャンパス  
2019年9月22日～23日



## ■プログラム概要

大会テーマ：「続・大研究 SDGs！」

・日時：2019年9月22日（日）12:00~18:00、9月23日（月・祝）9:00~18:00

・場所：神戸大学大学院人間発達環境学研究科（兵庫県神戸市灘区鶴甲3-11）

### 開催趣旨

本研究集会は、「地球環境の持続性・地域の経済発展・まちづくり・人の暮らし・エンパワメント・教育・生物多様性・文化の多様性」などをキーワードとする多層多元的な領域の実践者・研究者が集う場として、2016年から年1回開催されている。多様な人々がそれぞれの活動を通して感じている課題を持ち寄り交流する中で、「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development; ESD）」の概念・推進方法・課題・可能性について考え、議論し、新しい価値や動きを生み出していこうとするものである。

2016年9月に開催した第1回集会では、E（education：教育）・S（sustainability：持続可能性）・D（development：開発）という3つのアプローチから、ESDの理解を深めた。続く2017年9月の第2回集会では、「地域・社会の活動をつなぐことでどのようなESDが生まれるのか？わたしたちの暮らし（い・しょく・じゅう）から考えていこう」をテーマとし、身近な問題からESDをめぐる議論を展開した。また、2018年9月に開催した第3回集会では、国連で提唱された「SDGs（持続可能な開発目標）」に注目し、「大研究 SDGs！」というテーマを設定した。しかし、ここで十分な議論ができたとはいえず、ESDとSDGsの異同についての認識は曖昧なままであった。

そこで、2019年第4回集会では、「続・大研究 SDGs！」というテーマで、引き続きSDGsを話題の中心に据え、多くのセクターの関心を集めるSDGsと、あらゆる人が社会の中で主体になることをめざすESDとの関係を、より深く、具体的に考えることを目的とした。

主催：ESD推進ネットひょうご神戸（RCE兵庫-神戸）・

神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

共催：神戸大学大学院人間発達環境学研究科「学術 WEEKS」

後援：兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会・関西SDGsプラットフォーム・

ESD活動支援センター・近畿地方ESD活動支援センター

協力：ESD推進ネットひょうご神戸所属団体

9月22日(日)

時間	プログラム
11:30	受付
12:00	開会 主催者あいさつ(野崎代表)
12:10	ポスター発表
14:00	基調講演「SDGsと学びづくり」 講演者：田中治彦(元上智大学) 指定討論者 清野未恵子(神戸大学)
16:30	ESDカフェ(ワンコイン交流会)
18:00	1日目終了

9月23日(月・祝)

時間	プログラム
8:30	受付
9:00	分科会「続・大研究SDGs!～あらゆる人がSDGs運動の主体となるには?」 第1分科会：SDGsと人財育成 ～SDGsを拡める・実現するための人づくりの仕組み～
	第2分科会：SDGsを進める出会いの方法 ～ユースと多世代の交流をどう生み出す?～
	第3分科会：市民社会とSDGs ～地域住民・企業(人)・中学生の視点から持続可能な社会を考える～
12:00	昼食休憩
13:30	自由研究発表
	第1室
	第2室
	第3室
15:30	総合討議 「続・大研究SDGs!～私たちはどう行動するのか?～」 分科会の提言・提案をふまえて
18:00	終了

## ■ポスターセッションに見る SDGs の力強さと ESD の課題

八木 純二（公益財団法人 PHD 協会）

2019 年度の第 4 回 ESD 実践研究集会のテーマは『続・大研究 SDGs!』。そのオープニングイベントとなった「ポスターセッション」の進行を務めさせていただいた。

2019 年度のポスターセッションでは ESD を実践してきた団体と個人から 14 の実践研究が報告された。2019 年度の報告の特徴として 2018 年度にあった中学生や高校生の発表が無くなり、自覚的に ESD の観点から各々の活動を推進してきた実践者による報告が主になった点があげられる。また、多くの報告者は SDGs の 17 の各ゴールを交えて活動を語った。2018 年度実践研究集会では、SDGs に対して懐疑的とまではいかないものの、これまで実践してきた分野と関連するであろう SDGs の各ゴールに対して、どのようにアプローチをして良いかわからない、といった雰囲気があった。この前年度の雰囲気と比較するとたった一年で大きな変化が生じていると感じた。個々の ESD 実践者の間でも SDGs への理解が進み、各ゴールを活用して自らの活動を定義し、明示することができるようになったのではないかと思う。2015 年 9 月の国連サミットで「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択されて以来、社会全体を巻き込みながら強力に推進されていく「SDGs 運動」ともいえる昨今の風潮とも合致しているのかもしれない。

2019 年度のポスターセッションは、こうした理解の進んだ SDGs を共通の土台に各活動報告がなされたと思う。恐らくそれは参加者の皆さんも同じ認識があったのではないか。これが SDGs の力なのだとポスターセッションを進行しながら感じた。ESD と比較しても SDGs はわかりやすいのだ。SDGs という共通言語を得て、報告者も参加者も司会者も饒舌になり、盛り上がりながらポスターセッションが進んだように感じる。

オープニングのポスターセッションで感じた SDGs の分かりやすいがゆえの力強さは、残念ながら ESD の陥っているフォーマル教育至上主義の誤謬と弱さを浮き上がらせたような気がした。ポスターセッションに続く各セッションではそうした ESD の弱さを感じざるを得なかった。教育や学校に関する議論は堂々巡りを続け、社会的貢献という文脈の多くは SDGs に帰結し ESD があまり試みられることはなかったように思う。

ESD 推進ネットひょうご神戸のメンバーの間でも、SDGs に対する理解が進んだからなのか、ポスターセッションを含め 2019 年度第 4 回 ESD 実践研究集会は SDGs のポジティブな面に議論の焦点があたったように感じる。まだ SDGs に対して理解が進んでいなかった 2018 年度第 3 回 ESD 実践研究集会の方が、ネガティブな面にもより多くの議論がなされていたのではないだろうか。今後は SDGs に対して、ESD 推進ネットひょうご神戸は批判的な思考をもって再度あたる必要があるように思う。その際、SDGs への理解を深めた ESD 実践者たちのアプローチは非常に有効だと信じている。2020 年度第 5 回 ESD 実践研究集会に期待したい。

## A I C L (あいくる)

”Meet the world, Learn together”

“出会い、つながり” 世界に出会おう、共に学ぼう

福井 良子 (AICL、JEARN)



AICL とはActive International Collaborative Learning。 Meet the world, learn together!  
(世界に出会おう、ともに学ぼう)

年齢、性別、生まれ、暮らし、性格、考え方。わたしたちはたくさんの「違う」「異なる」に囲まれながら毎日を生きています。世界にあふれる「ちがいを」"頭"だけでなく、"人"を通して実際に「知る」「出会う」そんな機会を提供しています。

I. Youth が中心となり、日本と海外の子どもたちが実際に出会い、学び合う場をつくる「Youth Summit」プロジェクト

II. 国際的視野を取り入れつつも、小学生からご年配の方まで気軽に世界を感じられるイベントを行う「AICL」プロジェクト  
「着物で国際交流」(三宮駅近くの青少年会館・ソーシャルキャンパスでほぼ毎月実施)  
「おにぎりで国際交流」「Hello the World」(神戸市立すずらんだい児童館で毎夏実施)

III. 国際的な視野のもと、「伝承文化・芸能」に着目することで、Youth が地域に目を向け、決められた正解を前提としない課題に向き合い、考え、話し合い、発表する「Folk and Culture」プロジェクト

2017年12月神戸市立小部中学校  
2019年2月 兵庫県国際交流協会  
2019年8月 兵庫県国際交流協会

AICL の背景となるiEARN

iEARN とは International Education And Resource Network の略で、ICT と教員のネットワークを駆使して世界各国で国際交流学習を推進している NPO です。加盟国 140 か国、30,000 の教職関係者・学校、2,000,000 の生徒たちが150 におよぶプロジェクトを軸に協働学習を行っています。

iEARN 国際協働学習の基本となっている3つの技法

1. プロジェクトをベースにした学習。
2. 国際協働学習をサポートする

iEARN Collaboration Center

3. 出会いによる「つながり」iEARN 国際会議



## ESD プラットフォーム WILL 多様性との出会いの場

渡邊 久美子（神戸大学 3 年）

### 1. ESD プラットフォーム WILL 概要

ESD プラットフォーム WILL は、ユースが中心となって、さまざまなボランティア実践を行うプロジェクトである。2019 年 4 月に開始し、現在の会員は、一般 11 名、大学生 26 名、高校生 5 名の計 42 名である。（2019 年 9 月現在）

### 2. WILL のねらい・ミッション

WILL のねらいは、多くの人や団体とともに、「持続可能な開発のための教育(ESD)」を進めていくことである。ESD を進め、持続可能な社会を実現させていくために、WILL は次のような過程が必要だと考えている。

まず、年齢・性別・国籍・持っている経験や背景など、多種多様に異なる人たちが、出会い、ぶつかりながらも、「つながる」経験を持つ。その経験がきっかけとなり、自己や社会を見つめなおし、行動やライフスタイルを変化させていく。そして、まわりの人を誘い、ともに行動をするしていくことで、ESD を推進する動きを波及させていく。このような過程を通して、社会が漸進的に変化することをめざしている。WILL では、このような狙いをもとに、ユースを中心としたメンバーが、〈出会い〉と〈つながり〉のあり方・方法を自らが動きながら考え、社会に提案すること、さらに、実践を継続する中で、自身も「ESD コーディネータ」へと成長し、多様な人や組織とともに、持続可能な社会づくりの主体となることをミッションとして掲げている。

### 3. WILL の展望

WILL は今後さらに多くの人や団体とのつながりをつくっていく。そのために、より多くの人や団体が WILL に参加できるように、透明性の確保や、仕組みの整備を行う。また、さまざまな事業を展開していくために、NPO 法人化を

めざす。

### 4. WILL の年間プログラム

1 年間に、以下のようなメインプログラムを行う。

4 月	オリエンテーション合宿
	WILL の核となる、ワークキャンプ・ワークショップ・ボランティアワークの体験をする。
6 月	ボランティア誘い合いウィーク
	ESD や SD に関連する実践を行なっている現場に、メンバーが誘い合って訪れ、活動に参加する。
7 月	ESD カフェ
	多様な人が集まり、ワークショップを通して、それぞれが自分たちの関心ごとについて、気軽に楽しく話し合う。
8 月	夏のワークキャンプ
	1 年のプログラムの中でも WILL のメイン企画。様々な出会いのプロセスを経験して、〈出会い〉、〈つながる〉ことのおもしろさを体感する。
9 月	ESD 実践研究集会
	NPO・企業・行政・学校などで ESD を実践している人や SDGs に関心のある人々が集まり、持続可能な開発について、また、ESD を進めていく方法を話し合う。
2 月	春創成合宿
	1 年をふりかえり、次年度の事業を創造する。

メインプログラムの他にも、WILL に参加する団体それぞれにが主催するプログラムがあり、メンバーは、どのプログラムにも自由に参加することができる。

お問い合わせ

Mail : [purattofomus@gmail.com](mailto:purattofomus@gmail.com)

Web サイトもご覧ください →

## 学校に行きたくないけど、行かなくてもいいかな (でもみんな行ってるし。お母さんは行かないと怒るし)

NPO 法人いまじん 岸本俊之 (仮称)

1. 学校って実はとても特殊な教育の場  
有史より、教育の場は、私塾が中心であった。学びの主体は、生徒(弟子)であり、生徒が、先生(師匠)を選択し、あこがれの先生を選んだ。孔子塾、ブッダの弟子たちの教団、イエス・キリストの弟子、適塾、松下村塾、寺子屋、そろばん、習字、林先生(今でしょ)、神戸大学の松岡先生(よいしょ)、学習塾アクロス(ネットで検索してください)・・・

2. 学校が出来たのは近代以降。近代国家の成立と富国強兵・殖産興業、明治政府によって学制が發布されてから、わずか 150 年程度。日本の教育は、軍隊から多くを得た。目的は富国強兵、殖産興業。ランドセルは、背囊、詰襟の制服は、陸軍の軍服、セーラー服は海軍の水兵さん、運動会は野戦演習、遠足は、行軍の演習。国のために国民を育成して、お国のために。近代国家はできて、近代的生活は手に入れたけど、温暖化は進んでるし、自然災害は多発、アマゾン火災はひどい状態。南極の氷は溶け続け、このままで地球は持続可能なのでしょうか？100 年後、ぼくの子どもや孫はこの地球で生きていけるのかな。

3. 教育ってなんだろう  
普通教育と義務教育。普通教育は社会的存在である人間が人間らしく生きていくための基礎的な知識、技術・方法などを学ぶこと。義務教育は、「すべての国民は法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負う」とあり、子女に普通教育を受けさせる義務を定める法律は、学校教育法のみで、学校以外に普通教育がない？子供は、学校に行く義務はなく(教育を受ける権利がある)、大人は子供を行かせる義務がある。でも、嫌がるのを無理に行かせる必要はない？

4. 教育を受ける権利と受けさせる義務  
憲法 26 条「すべて国民は法律の定めるところ

により、その能力に応じてひとしく教育を受ける権利を有する」。人間が人間らしくあるためには「教育」がなければならず、この意味で「教育を受ける権利」「学習権」は、基本的人権の最も大切なものである。(前文部事務次官前川氏)

4. 不登校の子どもたちに教育を受ける権利が享受されているのか

今日の日本では、義務教育を受ける場は、学校しかない。先進国で、義務教育の場が選択できない国は日本ぐらいと言われている。学校に行けない、行かないと、学校以外に選択の余地はない。じゃ、どうする？家にも親から責められるし、学校には行きたくないし。大した事教えてくれないし。

5. 教育の主役を「学校・先生」から「子ども・生徒」に取り戻す

まなびの中心には、子ども、生徒があるべき。学校・先生は、あくまで助ける役目で主役じゃないよね。そんな学校ないのかな？それって学校って言わないか。

6. 多様な価値観と多様な学び。多様な人間。学校に合わなかった子どもたちが元気になるしてほしい

不登校は、全国で 14 万人。子どもは減っているのにどんどん増えています。もう、学校システムは時代に取り残されてしまっているのかな。いつまでも、くだらない学校どうすればいいのかな。海外に留学でもするか。でも、英語できないから、塾に行くしかないか。学校の英語の先生、教え方へたで何言ってるかよくわからないし。



## ESD ボランティアぼらばん 邑久光明園 持続可能な島づくりプロジェクト

渡邊 一真 (ESD ボランティアぼらばん)

### 1. ぼらばんの大切にしていること

Key 概念	ぼらばん・エッセンス	現代社会の「当たり前」	Key 概念
脱効率化	人の手による きょうどう (共同・協働) 話し合い 誰もが横並びに参加する 領域横断な活動	機械化 効率化	効率化
手間暇化		専門家 領域限定の活動	専門分化
脱専門化	「現場」での活動 多様なメンバーによる活動 偶発的な出会い Inclusive-community	知識主導 固定メンバー	知識化
横断化		個人 用意された 予定調和的 目的合理的	予定的 独立性
市民化	「違う」ことから始まる	固定観念・差別	画一化 同質化
脱知識化			
実動化			
偶発性			
異質性			
多様化			
脱同質化			
脱画一化			
多質化			



### 2. 邑久光明園とは

岡山県瀬戸内市邑久町長島に位置する国立ハンセン病療養所。1996年のらい予防法廃止まで、約110年の隔離の歴史がある場所。現在83名の方が住まわれています。平均年齢は86.5歳になっています。(2019.8)

### 3. プロジェクト概要

国立ハンセン病療養所邑久光明園でのボランティア活動です。「いのちの持続性」を大切にす社会を目指して、「差別・隔離の島から、出会いと交流の島へ」を理念に、2007年度より活動しています。

### 4. 2019 プロジェクト

#### ワークキャンプ

ぼらばんの軸になる活動。集団で海岸清掃活動・草刈りなどを通して、土地にじっくり関わり、考え行動する活動をしています。

#### つどいの広場づくり

隔離されてきた長島を、出会いと交流

の島に変えていくための「つどいの広場」を作っています。人が集まる仕掛けづくりを模索しています。

#### みかん畑

入居者の果樹園を手伝い、引き継いでいます。果樹園をかつての入居者の方の生きた歴史として「継承」とともに、ソーシャルビジネスとして展開を模索しています。

#### 心の風景ジオラマづくり

活気溢れる邑久光明園の様子を再現する(昭和35年)ことを通して入居者のエンパワメント、メンバーの固定観念をほぐす、未来へのつながりを目的としたPJです。

#### こみよたん玉

思いを「こみよたん玉」として島のあちこちに残していきます。

#### 翻訳

散策マップの翻訳。現在、英語版が完成しています。今後、中国語、韓国語にも着手予定

## 海と空の約束プロジェクト

### ～ グローカルに展開する実践に繋げる環境教育・消費者教育について ～

西谷 寛(海と空の約束プロジェクト)

#### 1. 目的と概要

##### (1) 目標

環境に興味を持ってもらい自分の問題として行動変容にまで繋げる啓発・教育活動を展開し持続可能な社会形成の基盤の一つである環境問題の解決を図り、持続可能な社会づくりに寄与する。

##### (2) テーマ

3R、生物多様性保全、気候変動、地域環境再生・活性化、防災教育、食育・食料問題、消費者教育に寄与する。

##### (3) 対象

◎保育園、幼稚園、小中学校、高校高専、大学、若者、社会人、親子、高齢者と全ての世代が対象。

◎学校園だけでなく地域社会を舞台に社会教育を展開

##### (4) 国際的活動

出版した環境絵本を15言語に翻訳しJICA関西、国際交流学生団体、NGO/NPO等と協働し教育教材のアジア、アフリカの学校、図書室等への提供を進め識字率向上と環境人材育成推進に努めている。

#### 2. 結果の概要

(1) 自宅のある小学校区内を中心に幼稚園、保育園、小学校、中学校に環境学習のゲストティチャーに行き、校区内を流れる都市河川の保全活動を皮切りに「まちの活性化対策」や「多世代の交流活動」、防災教育、事業者との協働に繋げつつある。

(2) 明石、神戸を中心に地域イベント、行政や事業者の取組等に協力しながら緩やかな繋がりを広げながら活動中。一具体例として「プラスチックごみと未来を考える」という公開公募した事業を事業者、行政、関係団体と協働で実施できた。

#### 3. 考察と課題

- (1) 学校教育と社会教育を緩やかに繋げることにより、地元地域性（故郷感）、総合性、継続性を高めることができる考える。
- (2) 幼児教育でも小中学校での教育も地元地域性を高めると、興味も持ちやすいし自分事として考えやすいので実践に繋がりがやすいと考える。
- (3) 2018年度から自宅近くの小学校のコミュニティスクールのディレクターに就任して公開講座やまちづくりとも関わっている。
- (4) 世界の子どもの識字率向上、環境意識啓発のため教材提供（JICA等とコラボしてアジア、アフリカ等の学校図書館を支援）

#### 4. 課題

- (1) 小学校が地域活動、まちづくりとも深く関わっていくコミュニティスクールが一層広がっていくこと。
- (2) 後継者、協働者の育成
- (3) 事業経費、人件費など活動費不足
- (4) 更なる活動場所、協働事業の開発
- (5) 広報力、事務作業力

#### 5. 主張

- (1) 環境学習、ESDを学校園だけに任せては地域性や継続性、自分達の故郷意識の醸成が進みにくくESDとして不十分なケースも多い。
- (2) 地域で行う社会教育の更なる発展や地域で進めるため地域の地域団体や企業、学生、NGO/NPO、専門家が協働して事業を企画したり、行政、学校園に一層協力して行くこととそれを促進する仕組み作り、繋がりが作りが更に必要。

Facebook(海と空の約束プロジェクト)で、主に発信しています。お問合せは、[happy24tani@yahoo.ne.jp](mailto:happy24tani@yahoo.ne.jp)にお願いします。

# 大船渡 ESD プロジェクト

## ユースのまちづくり参画

宮本 貴生（大船渡 ESD プロジェクト）

### 1. 大船渡 ESD プロジェクトの概要

2011年4月に神戸大学 HC センターを基盤としてぼらばんメンバーを中心に結成された。以来、年数回継続的に岩手県大船渡市赤崎町で復興支援活動を行ってきた。赤崎地区公民館を拠点として、仮設住宅や津波被災跡地での活動を続けてきた。2018年度は5回の現地訪問をした。現地訪問では主に赤崎復興市の支援を行い、赤崎復興隊とのつながりを生かしてまちづくり支援を行っている。

### 2. 赤崎復興市

2013年9月に始まり、2018年度は4回行われた。赤崎復興隊のメンバーが企画・運営を行い、高台移転後も住民が赤崎で生活するために地域経済の場、地域交流の場として機能している。金券制度を採用しており、配当金が住民に還元される仕組みであり、住民参加型の活動である。地元住民の店舗だけでなく他地域からの出店やステージ出演も行われている。

本プロジェクトとしては、会場準備から片付けまでを赤崎復興隊と協働している。当日はたこ焼き・ヨーヨー釣りなどの店舗を運営し、利益はすべて赤崎へ還元している。たこ焼きの運営は地元の小中高生とともに行っており、大学進学に伴って地元を離れたユースも復興市の度に赤崎に戻り、復興の一端を担っている。

### 3. ユースとの関わり

2013年に赤崎の中高生が主体となって開催された「だべこ祭り」の支援をきっかけに「赤崎復興隊ユース」を結成する。まちの未来を担うユースが赤崎復興隊の行う様々な活動に参加できるように情報を流し、本プロジェクトメンバーもユースと一緒に活動を行なった。具体的には赤崎復興市のブース運営、まちづくり WS への参加、慰霊の日での灯籠作りなどに関わってもらえた。また「ユースリターン

プロジェクト」として地域を離れた若者が赤崎のまちづくりに関われるように補助を行ってきた。

### 4. 今後の展開

これまでは復興隊の行なっている活動にいかに関わってもらえるかに焦点を当てていた。しかし、単発的になってしまう・主体性が生まれず次の活動に結びつかない・本プロジェクトメンバーを通してしかユースと復興隊のつながりがない、などの課題が浮き上がってきた。そのため今年度はユース自身が何をやりたいかをしっかりと聞いて、それをサポートする体制をとっている。

持続可能なまちづくりのためにはユース世代が、一時的にまちを出ていったとしても、「その土地で自分がやりたいことができる」という認識を持ってもらわなければならない。そのためには「人のサポート・モノのサポート・お金のサポート」の3つが必要である。赤崎ではユースには圧倒的に「人」、特に同世代のそれが足りていない。つまり赤崎でユース同士・住民とのつながりを作り上げることが必要だと本プロジェクトは考えている。復興隊の活動にユースを入れるだけではなく、ユースの活動を活発化して、それを復興隊や本プロジェクトがサポートする体制を作りたい。

今後は、

- 1) すでに関わりのあるユースの自発性・主体性を引き出す
- 2) ユース同士の横のつながりを作る
- 3) 赤崎中学校との連携を通して、中学生のうちからまちづくりに関わってもらう
- 4) WILL として地域住民とともに他災害地域や ESD そのものについて考えるを念頭に置いた活動を行う。

## 生きた学びの場としての里山農環境の可能性 ～休耕田とそれに続く里山をフィールドとした学童保育活動報告～

吉良佳晃（吉良有機農園）

### 1. はじめに

21世紀は「環境の世紀」と言われ、環境教育や自然とのふれあいイベントが注目される一方で、農村部では里山の荒廃、耕作放棄地の増加が大きな問題となってきている。そこで、自然との関わりが制限されやすい一般的な公園や管理された自然公園ではなく、休耕田やそれに続く里山をフィールドとし、単発イベントではなく継続した学童保育の活動の場として展開することで、生きた学びとなることを期待している。

ここでの「自然」とは里地（田畑やその周辺を含む）と里山の自然であり、武内ら<sup>1)</sup>が述べているように、「里山の自然は、自然と人間の共存の結果としての二次的自然であり、(中略)自然に対する適正な人間の働きかけが不可欠だ」との前提をおく。

### 2. 学童保育の活動概要

吉良有機農園（兵庫県丹波篠山市、以下「農園」という）の休耕田とその周辺をフィールドに、2018年から1回/月、2019年からは2回/月のペースで、つばみの家（京都市、以下「学童」という）の小学生たちが活動している。

活動日の大まかな流れは次のようになる。

午前10時頃に農園到着後、ミーティング（本日の活動、危険への配慮など）を実施。お昼ご飯を自炊するため、薪集めから火起こしチームと調理チームに分かれて行動を開始する。みんなでお昼食をとり、午後からは自由時間となる。季節によりみんなでタケノコ掘りなどに取り組むこともあるが、基本は子どもたちが自分のしたいことを自分で決める。保育者（時には保護者も）見守り、一緒になって活動する。竹を切り道を切り開いていく子、自分たちで掘った水路で生きもの観察をする子、基地づくりを始める子、など実に様々である。午後3時頃に片付けし終了となる。

### 3. 活動環境や子ども、関わる大人の変化

目標の一つとして、「自炊は自分で頑張る」を挙げている。毎回時間との勝負であるが、回数を重ねるごとに役割分担や段取りがスムーズにいくようになり、活動の柱になっている。

また休耕田であった期間が8年に及んでいたため竹林が侵入し、草丈も高く密集していたが、子どもたちの活動、保護者、ボランティアの方々の協力により、田んぼの姿が見え、土水路にはカエルやサンショウウオなどが回復した。

そしてインタープリターが農業を生業としている集落の農家であり、地域の農環境を、教育・保全・事業・学び・遊びがつながった生きた場として活用できる可能性を感じ始めている。

### 4. 見えてきた課題と今後に向けて

一方で課題も見えてきている。

生きものや道具の扱いという具体的なものから田畑の見えにくい境界や自然との関係といった広い抽象的視点まで、自由の中でのルールにどう気付き、身に着け、保育や教育の場として適切なものとしていくのか。

また本活動のきっかけは、「子どもらに緑と土と太陽を」を理念としたみつばち菜の花保育園<sup>2)</sup>（京都市）でのつながりであり、現在は農園と学童とのクローズな関係となっている。

今後、地域の方々、市内の小学生との交流、農村価値と保育・教育とをつなげる確かな活動としていくためにも、学術的アプローチや幅広い意見交換を実施していきたい。

### 引用文献

- 1) 里山の環境学（東京大学出版会／武内和彦・鷲谷いづみ・恒川篤史／2001.11）
- 2) 子どもは発達まっ最中：主体性・柔軟・関わり・集団（文理閣／棚橋啓一／2016.8）

## プレーパークこうりがおか

高尾千秋（ひらかた市民活動支援センター理事・Camplife）

### 1. プレーパークとは

プレーパークは、冒険遊び場とも呼ばれている。日本冒険遊び場づくり協会は「冒険遊び場は、子どもが『遊び』をつくる遊び場。（中略）『やってみたくと思うこと』を実現していく遊び場です。さまざまな遊びが展開されていくので、変化しつづける遊び場ともいえます。禁止するのではなく、いっしょに考えてやってみる。」と説明している。

子どもたちが、創造や工夫により自ら遊びをつくることができる場、多様な遊びが展開される場、共に遊びサポートしてくれるプレーワーカー・プレーリーダーと呼ばれるスタッフがいる、などが条件としてあげられる。

1950年～60年代英国やドイツの冒険遊び場など欧州諸国の取り組みが大村夫妻によって日本へ紹介された。国連が採択した「児童権利宣言」20周年記念にあたる1979年「国際児童年」に東京都世田谷区の羽根木プレーパークが、国内で初めて開設された。同協会の2016年度調査では、全国236箇所で開催されているが、関東圏に多く、関西圏ではその半数程度である。

### 2. 子どもの遊び

遊びこそが他の動物と人とを分かち最大の行為であるとし、「ホモ・ルーデンス（遊び人）」を著したのが、オランダの歴史家ホイジンガである。ホイジンガの影響を受けたカイヨワは、規則と脱規則、意志と脱意志を軸に、アゴン（競争）、アレア（運）、ミミクリ（模擬）、イリンクス（めまい）の4つに遊びを分類した。

国際児童年に IPA（International Playground Association）は、「遊びの権利宣言」を作成、子どもの遊びの特質を説明している。

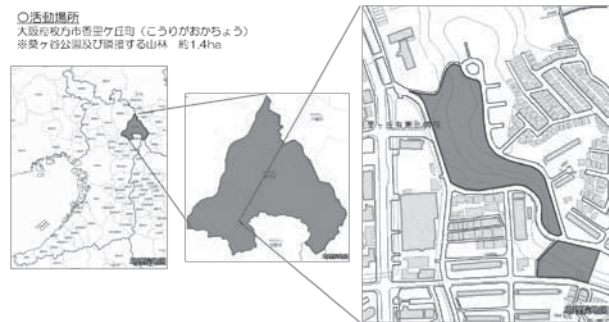
### 3. 社会の変化と子どもの遊び

1970年以降から、受験競争の激化と都市化が相まって、子どもが遊ばなくなった。遊ぶ「時

間・空間・仲間」の「サンマ（三間）が無くなった」と言われている。また、人間関係の希薄化等により、地域社会の大人が地域の子どもの育ちに関心を払わず、積極的にかかわろうとしない、または、かかわり方を知らないという傾向も見られる。

### 4. プレーパークこうりがおか

現地は、京阪電鉄枚方市駅から南へ2.5km市の南部生涯学習センターに隣接する桑ヶ谷公園に続く場所あり、前にはスーパーマーケット等の商業施設もある、ごく普通の町並の中にある。



2017年10月よりUR香里団地の斜面林の有効活用するために、プレーパークを試験的開設が始まった。UR都市機構西日本支社・ひらかた市民活動支援センター・Joinネイチャースクールの3者で実行委員会を組織し準備を進めてきた。2019年3月には斜面林がUR都市機構から枚方市に譲渡、市の公園となり、ひらかたしプレーパーク実行委員会が市からの委託を受け、本格的なプレーパークが開始されている。現在は、月1回（第4土曜日）に開催し、前週の土曜日にスタッフが集まり整備を行っている。

人材の開拓（様々な分野・世代・能力が関わる里山保全）、ルールの開拓（法的な課題の解決とそのノウハウの蓄積）、ニーズの開拓（身近な自然を楽しむライフスタイルの提案）の3つの開拓を実行委員会の目標とし、実践を進めている。

## 神戸市・福田川における市民主体の流域マネジメントに向けて

高田 知紀（神戸市立工業高等専門学校 都市工学科）

### 1. 福田川の概要

福田川は、神戸市の垂水区、須磨区を流れる河川延長 7.41km、流域面積は 16.88km<sup>2</sup> の二級河川である。落合池、市の子ダム、滝ヶ谷池、谷子池を源流として、垂水区平磯において大阪湾に流入する。

河川の構造は、その大半がコンクリート三面張りの河道となっているが、上流部および中流部においては、一部が親水公園として整備されている。下流部も基本的にはコンクリート三面張り、もしくは矢板による護岸が施されている。福田川はいわゆる典型的な都市河川の構造をもっているといえる。

福田川では 2019 年時点で、福田川クリーンクラブ、れいんぼうキッズ、フクレンジャー、垂水すつきやねんクラブ、名谷 SR 会といった多様な市民組織が、河川環境の保全、流域の小中学校における環境教育活動、地域イベントを展開している。

### 2. 「魅力も問題もない」福田川

福田川流域における市民活動の先駆者であるフクレンジャーの市川勝巳氏は福田川を「これといった魅力も問題もない川」と表現する。河川環境の保全活動が取り組まれるケースとして多いのは、ひとつは希少な動植物が生息するなど生態学的に価値を有する環境か、あるいは深刻な水質汚染や水害リスクなどの課題が共有されている場合である。すなわち福田川はそのどちらでもないため、地域住民が福田川に関心を抱きにくいのである。しかし、見方を変えれば、全国の都市河川の多くは福田川と同様の状況にあり、福田川で住民主体による流域自治を展開することができれば、参考事例、先進事例としての意義は大きい。

### 3. 福田川流域ネットワーク会議の設立

2017 年 5 月に、神戸高専都市工学科と神戸市垂水区役所まちづくり課が事務局となり、「福田川流域ネットワーク会議(FRN 会議)」を

立ち上げた。この会議では、市民団体、小中学校、高校、自治会、神戸市や兵庫県の関係部局が参加し、3 年計画で福田川再生アクションプランを作成するための議論を行う。

FRN 会議設立のきっかけとなったのは、福田川クリーンクラブの主催で開催された「福田川再生フォーラム」での議論である。このフォーラムは 2016 年と 2017 年に開催され、参加者が「福田川再生ビジョン」についての意見交換を行った。その議論のなかで、福田川を包括的に再生してゆくためにはまず「流域一貫」の体制構築が必要だという認識に至った。その具体策として立ち上がったのが FRN 会議である。

### 4. 支流「小川」の保全プラン

FRN 会議では、2018 年から 2019 年にかけて、福田川の支流である「小川」の環境保全方策について検討を進めてきた。小川は、福田川流域の中で貴重な里山環境が残存するエリアである。しかしこのエリアは市街化区域であるため、将来的には宅地開発などの事業が進められる。現に、2018 年より、民間事業者による宅地開発に向けた調査などが進んでいる。FRN 会議では、福田川流域の中の貴重な里山およびその景観・生態系を保全し、持続可能な環境としてマネジメントしていくためのプランを検討した。

このプランは、「開発か保全か」という対立的な思考ではなく、小川周辺の人びとが里山や豊かな生態系とともに暮らす新たなライフスタイルを提案するものであり、そのために必要な環境整備案およびエリアマネジメントの体制についても言及している。重要なのは、開発が行われなかったとしても、小川の環境を里山として持続可能なものとするためには、竹の侵入による環境の荒廃や担い手不足などの問題を解決する必要があるということである。人口減少社会における里山環境の保全では、開発を免れたとしても、そこにはまた別の問題が立ち現れることを認識しなければならない。

## 教育事業「AWAJI 未来探検隊」の取組について ～子どもたちによる地方創生とまちづくり～

重信 圭佑（国立淡路青少年交流の家）

### 1. 事業背景

淡路島の課題として、人口減少による地域の衰退があります。その原因のひとつとして青少年が進学等のため淡路島を離れ、そのまま帰ってこないことが挙げられます。そこで、青少年が淡路島に愛着を感じ、未来の淡路島を自分たちで創るのだという意欲と、将来は淡路島でこんな暮らしをしたいというイメージを思い描くことで、将来、淡路島に戻ってくる可能性が高くなると考えられます。

### 2. 事業主旨

小、中学生を対象に体験を通して淡路島の魅力について実感してもらうことなどにより、淡路島に誇りを持ち、未来を創る青少年を育成することを目的とします。また、高校生や大学生がリーダーとして活動することにより、異世代交流の機会とするとともに、高校生や大学生に対しても、地域への愛着を感じてもらい機会とします。

### 3. 過去4年間の取組

#### (1) 玉ねぎの魅力とオリジナルバーガー考案・販売



#### (2) 塩と米の魅力と具一グランプリへの出場



#### (3) 南淡そうめんの魅力とオリジナルレシピ考案



#### (4) 淡路島牛乳の魅力とオリジナルレシピ考案



#### (5) うずしおの不思議と壁新聞による発表



### 4. 今後の展開

即時効果を見込みにくい取組のため、今後も継続して企画委員会からの意見を集約し、事業展開を行っていく予定です。高校生・大学生の皆さんも、ボランティアとして是非ご参加を検討ください！



## 誰かの笑顔につながるお買いもの コープこうべのエシカル消費

生活協同組合コープこうべ  
齋藤 優子

### 1. コープこうべの概要

コープこうべは社会運動家・賀川豊彦の指導のもと、1921年(大正10年)にその前身が誕生しました。

1991年(平成3年)創立70周年を機に名称を「生活協同組合コープこうべ」に改称。組合員の暮らしを支え、豊かにする事業や活動を展開しています。

一人ではできないことも、みんなの力を合わせて、願いや夢をかたちにする、「愛と協同」の精神を原点に活動しています。

生協の主役は組合員。一人ひとりがお金を出し合い、商品やサービスをみんなで利用し、運営に参加することで成り立っています。

### 2. 賀川豊彦と協同組合

社会運動家として、キリスト教伝道者として、その生涯を人間愛に生きた賀川豊彦。1909年(明治42年)12月24日のクリスマスイブ、神戸の貧民街に移り住み、救済活動と、宣教に努めました。賀川豊彦は、活動を続ける中で、貧しい人々、弱い人々が救われるのは施しによってではなく、経済の仕組みの中で、人間を大切にし、お互いを尊重する相互扶助の組織を作らなければと考えるようになりました。それが協同組合でした。

賀川豊彦が書いた「協同組合中心思想」

- ①「利益共楽」
- ②「人格経済」
- ③「資本協同」
- ④「非搾取」
- ⑤「権力分散」
- ⑥「超政党」
- ⑦「教育中心」

### 3. コープこうべのエシカル消費

賀川豊彦の考え方をベースにするコープこうべには、設立当時より、その時代時代に応じた社会的課題を、買い物を通じて解決してきた長い歴史があります。

公害や農薬・添加物の問題、エネルギーなど、その時々に対応した商品や買い物行動を組合員と共に創造し、それは、「安全・安心」という言葉で表現されてきました。

コープだけが「安全・安心」ではなくなったこの時代に、コープこうべの役割を再確認する意味で、また、もう一度組合員とともに学び合い、考え合うという意味で、今、「エシカル消費」に焦点を当て、取り組みを進めています。

#### 【コープこうべのエシカル消費】

##### コンセプト

「誰かの笑顔につながるお買いもの」

##### エシカルの4つの視点

- 「1. 公正な社会の実現」
- 「2. 豊かな地域づくり」
- 「3. 地球環境保全」
- 「4. 人への支援」

この取り組みは、「学ぶ」ことなしには、前に進みません。ただ商品を並べているだけでは、商品の持つ意味が伝わらないからです。

「買い物かごが社会を変える」

コープこうべに受け継がれたこの言葉の意味を、今一度見直し、暮らしと社会のつながりについて学び、考える活動を進めていきます。

## 神戸市立公民館における ESD の取り組みについて ～地球上の様々なつながりを大切にしよう ESD 子供講座の開催～

芝野 雄介（玉津南公民館）

### 1. 目的

市内公民館で継続的に開催している講座において、「持続可能な社会づくりの担い手を育て（ESD）」教室を開催。

持続可能な社会づくりの担い手となる「子供たち」が、現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことで、課題解決につながるような価値観や行動が身につくことを目的としています。

### 2. 取り組み状況

平成 29 年春季講座よりスタートし、3 年目。市内 3 か所の拠点公民館（住之江・長田・玉津南）で開催。30 年度の実績は以下の通り。

事業（講座）数	
29 年度	30 年度
6 講座	⇒ 9 講座



参加者数	
81 名	⇒ 189 名

ESD スタッフ数	
12 名	⇒ 18 名

＜資料＞  
R1. 最新  
募集チラシ

※公民館の ESD（持続可能な社会づくり）講座とは…  
『地球上の様々な「つながり」を大切に』をテーマに子供講座を行います。ESD スタッフとして一般の方も参加しています。

<p><b>21</b> 応募先：住之江公民館 全1回</p> <p>作ろう！ ヤッチャー</p> <p>10/5(土) 14:00～16:00 小学生と保護者 組 16名 子供 1人 800円 芝野 晶子</p>	<p><b>22</b> 応募先：長田公民館 全1回</p> <p>プログラミングで オリジナルゲームを作ろう！</p> <p>12/27(金) 13:00～16:00 小4～6年生 13名 無料 関西学院高等学校 コンピューター部</p>	<p><b>33</b> 応募先：玉津南公民館 全1回</p> <p>うどん作りに挑戦</p> <p>10/26(土) 10:00～13:00 小学生と保護者 8組 16名 1人 600円 花川製菓所 辻 博志</p>
---	--	---


30 年度より、玉津南公民館では、講座だけでなく、夏季休業中に実施の「スタディサポート玉津」でも参加者を募集、新たな取り組みとして事業をスタート。

今年度は、参加者とのつながりを生み出せるようにするため、参加者ファイル（※右資料）を作成。春の出会いから継続して、秋季講座に参加していただけるよう期待も込めた。

### ESD スタディツアー参加ファイル

6月22日（土）「親子で農業体験」 10:00～12:30  
＜ESDの視点・本日の課題＞

- ・田植えやさつまいもの苗付けを通しての農業の大切さを実感する。
- ・田植えやさつまいもの苗付けを体験や体験のサポートを行う中で、参加する親子や菅野農家の人々など世代の違う人達のつながりをもつ。

参加講座 (教室)	令和元年6月22日 参加 「親子で農業体験」
ふりがな	
名前	
住所	
電話番号 (携帯電話)	
学校・勤務先 (職業等)	神戸大学 海産科 1a
参加動機	僕は生まれも育ちも大阪の大阪市の都会人なので、農業体験という貴重な体験をしてみたいから。お父さん、子供が好むから。
出会い	農業は地味というイメージがあったが、実際にやってみると来て、おもしろいと感じた。よくテレビで畑のなすが真実と並んでいるのを見るが、これを完成させる農家さん本当に尊敬します！
つながり	今日、農作業は若者が担い手となって進められていて、友達との体験を話して少しでも農業に興味を持ってもらいたい。
今後の実践にどう役立てるか	
講座(教室)への評価	4 大変満足 (○) 3 満足 ( ) 2 やや不満 ( ) 1 不満 ( )
神戸市立公民館 ESD 講座(教室)	

### 3. 今後について

ESD スタディツアーの参加を通して、大学生だけでなく、地域住民、立場の異なる人々が共に考え、解決を図っていけるようにする学びの場を設定してきた。さらに、多様な「つながり」による新しい社会の力を創造できるよう、その可能性を探り、検証していきたい。

学びや活動と参加者がつながり、地域の学びと活動を活性化するとともに、多様化し複雑化する課題と社会への対応ができるよう、自発的な活動を促すきっかけづくりを推進していく。

また、新しい何かではなく、公民館ですでに行っている事業がすでに SDGs という視点に立ち、「地域が輝く未来を目指すために」、地域のために公民館でできることを見える化できるように発信していきたい。

## 公益財団法人 兵庫県国際交流協会 (HIA)

～世界の人々と共に生きる国際性豊かな社会の創造をめざして～

多木和重 ((公財) 兵庫県国際交流協会)

### 1. 概要

兵庫県国際交流協会は、兵庫県の国際化と県民の国際交流活動を促進し、外国人の暮らしやすい地域社会をつくり国際社会の発展に寄与することを目的に、1990年に設立されました。

当協会は、ギャラリーや図書室などの機能も持つ本部が神戸東部新都心 (HAT 神戸) に、外国人県民インフォメーションセンターが JR 神戸駅前に立地するほか、5か所の海外事務所 (パリ、香港、西オーストラリア、ワシントン、ブラジル) を管理・運営しています。

### 2. HIA のミッション

当協会では、「多文化共生社会の実現」、「交流人口の拡大」、「人づくりへの貢献」の3つを機軸として、様々な事業を行っています。

#### (1) 多文化共生社会の実現

外国人県民の児童生徒の学習や地域社会への参画等にかかる課題を解決するとともに、外国人県民が安全で安心して暮らせる社会づくりを進めます。

- ・外国人への日本語学習・教科学習支援  
地域ボランティア団体や外国人コミュニティと連携して外国人県民の居場所となる日本語・母語学習教室を支援
- ・外国人県民への生活支援  
外国人県民インフォメーションセンター運営による相談や情報提供を実施
- ・「多文化共生」を考える研修会の開催

外国人県民の現状や課題等について理解を深めるための研修会を開催

#### (2) 交流人口の拡大

国内外の人的交流を推進し、県民の国際交流を進めます。

- ・国際交流の推進
  - ① 姉妹・友好州省等との交流  
海外事務所等を通じて、兵庫の魅力を発信し、県産品の販路拡大支援、観光 PR

等の経済交流や教育・文化交流を推進

#### ② ホームステイ・訪日教育旅行の受入

海外からの訪問者との相互理解が深まることを目的として、ホームステイのシステムを構築するとともに、訪日教育旅行の受入を推進

#### ・知的交流の推進

##### ① オックスブリッジ英語サマーカーンプの実施

オックスフォード及びケンブリッジ大学の学生を県内の大学、高校等で受入れ、英会話の授業や交流イベントを実施

#### ・国際理解の推進

##### ① ひょうご国際交流キャラバンプロジェクト

県内国際交流団体と連携し、国際交流員等による国際理解セミナーや交流活動の実施を通じ、県民の国際理解を促進

#### (3) 人づくりへの貢献

国際社会を担う次代の国内外の人材育成を進めます。

#### ・私費外国人留学生奨学金の支給

留学生の生活の安定を図り学習活動を支援するため、私費外国人留学生に対し奨学金を支給

#### ・ひょうご海外研修員の受入

友好州省をはじめとする諸外国から研修員を受入れ、研修機会を提供することにより課題解決型の交流を実施

#### ・学生インターン等の受入

### 3. まとめ

4月に施行された入管法改正等により、外国人県民の一層の増加が予想される中、相談窓口業務の拡充 (休日対応、多言語対応) や日本語教育の充実を図っています。今後も、HIA の果たすべき役割を明確にし、地域が抱える課題に対応できるよう、地域のボランティア及び国際交流団体と連携し、事業の充実に努めます。

## PEPUP の国際協力活動 フェアトレード

### 1. フェアトレード

ペパップは途上国の貧困格差の問題に対してフェアトレードを通じて関わっています。フェアトレードとは途上国の都市や農村の小生産者、女性らによる製品を、適正な価格と条件で、仲買人を排して買い取り、普及することで、貧困の解決に貢献しようという活動です。

苦境にある当事者の生産活動、経済活動に関わることで、彼らの生活改善とエンパワーメントに協力することが目的です。与える援助ではなく自立的な活動への協力活動です。

### 2. ペパップ

ペパップ（自立と平和のためのパートナーシップ）では、フィリピンの NGO「フェアトレード南のパートナー」SPFTC と連携をして、セブ地域を中心とする農民、スラム住民、女性らの生産するフェアトレード製品を神戸で普及しています。それを通じて、生産者の社会的背景、日本との関係、グローバル経済について考えるきっかけを提供します。

神戸大学の学生を中心としながら、他大学学生、社会人とも一緒に活動しています。学生だけで輸入手続きをできるのが自慢です。

### 3. アクティビティ

ペパップでは3つの柱を立てて活動を行っています。

#### ①伝える

フェアトレードはモノの売り買いをするビジネスです。ペパップは多くの市民にフェアトレードを知ってもらい、また製品を買ってもらうことに取り組んでいます。しかしそれは儲けるためではなく、フェアトレード製品のやり取

りをきっかけにして、どういう環境にある人が生産したのか、フィリピンなど途上国と日本の関係がどうなっているのか、グローバル社会の課題は何か、などを考えるきっかけとしたいと考えているからです。イベントやセミナーなどを通じて多くの人に考えてもらいたいと思っています。

#### ②学ぶ

行動をすると同時に、現状を知ること、自分たちの活動の意味を考えることを重視しています。特に国際協力活動は、かかわりを持つべき人々が、遠く離れた海外にもいます。また国際情勢やグローバルな動きにも大きく影響を受けます。ペパップでは生産者、パートナーの状況、また活動や私自身の置かれた環境について学び、考えることを重視しています。

#### ③ 行動する

ペパップはフィリピンの NGO「SPFTC」から直接製品を輸入し、大学生協やイベントなどで普及をしています。「顔の見える関係」を大切に、フィリピンの生産者を訪問するスタディ・ツアーもほぼ毎年実施しています。時には小学校や高校を訪れて、フェアトレードや国際協力に関する出前授業も行っています。2015年には、新しいフェアトレードの形を模索するために、フィリピン国内で販売できるフェアトレード製品の開発やスラム地域での家庭菜園普及などの現地プロジェクトにも取り組みました。このようにいろんな可能性を創造的に追及しながらチャレンジしています。

### 4. 問い合わせ

<https://pepup-kobe.jimdo.com/>

email: pepup.souken@gmail.com

## ■基調講演「SDGs と学びづくり」の概要

講演者：田中 治彦

基調講演は、田中治彦氏の講演と、指定討論者および参加者からの質疑という形で進められた。田中氏の講演の概要を以下にまとめる。

### 1. 「持続可能な開発」と ESD

「持続可能な開発 (Sustainable Development, 以下、SD)」という言葉は、1980 年代初頭に漁獲資源問題をめぐって使われ始めたといわれている。その起源は、1987 年のブルントラント委員会報告書「私たちの共通の未来 (Our Common Future)」に遡る。当時、発展途上国側は、先進国が先に起こした大量生産・大量廃棄などの問題による規制を一律に受けることで自分たち途上国の開発が遅れることを危惧し、環境問題の解決に主体的ではなかった。しかし、当時焦点が当てられていた多くの課題は、途上国の開発をめぐる問題であった。

1992 年 6 月には、ブラジルのリオデジャネイロで開催された「地球サミット (環境と開発に関する国際連合会議)」で採択された「21 世紀に向け持続可能な開発を実現するための行動計画 (アジェンダ 21)」によって、各国が独自にローカルアジェンダ (地域環境計画) を作成した。ヨハネスブルグサミットでは、アジェンダ 21 からここまでの 10 年間に総括したが、好ましい成果が上がっていなかった。

そこで、SD を推進するためには教育が重要であるという視点から、日本がリードする形で「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development : ESD)」が提唱された。日本国内で文部科学省が ESD を 2011 年度学習指導要領へ記載し、ユネスコスクールを中心とした ESD の取り組みが進められ、環境省は ESD 促進事業として 14 のモデル地区を選定した。また、国連大学によって、「持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点 (Regional Center of Expertise on ESD : RCE)」が設置された。

### 2. 国連ミレニアム開発目標 (MDGs) について

2000 年 9 月のニューヨークで開催された国連ミレニアムサミットで採択された国連ミレニアム宣言において、これまで、途上国中心に関心が低かった、1990 年代の主要な国際会議やサミットで採択された国際開発目標を統合し、一つの共通の枠組みとしてまとめられたものが MDGs である。

田中治彦 (たなか・はるひこ)

東京大学大学院教育学研究科博士課程 (社会教育コース) 修了。(財) 日本国際交流センター、岡山大学教育学部教員、南北ネットワーク岡山代表、岡山 YMCA 理事を経て、1997 年より立教大学文学部教授。2010 年よりは上智大学総合人間科学部教育学科教授 (2018 年退官)。認定 NPO 開発教育協会代表理事、子どもの遊ぶ権利のための国際協会 (IPA) 会員、日本社会教育学会理事などを歴任。神戸大学での社会教育主事研修の講師や ESD コース (3 学部) 立ち上げ時に外部評価者として参画している。

### ▶MDGsの目標と成果

目標 1	極度の貧困と飢餓の撲滅	10億人の人が貧困から脱却（17億→8億）
目標 2	普遍的初等教育の達成	就学率 83%（2000）から 91%（2015）に
目標 3	ジェンダーの平等推進と女性の地位向上	南アジアの男子 100 人に対する女子の割合 74 人（1990）→103 人(2015)
目標 4	乳幼児死亡率の削減	ほぼ達成
目標 5	妊産婦の健康の改善	2分の1に削減
目標 6	HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延の防止	達成
目標 7	環境の持続可能性の確保	達成されず
目標 8	開発のためのグローバルなパートナーシップの推進	

ミレニアム開発目標として挙げられる 8 つの目標と成果は、全てが関連しあっているため、まずこれらを理解することが重要であると田中氏はいう。

### 3.「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）」とは何か？

SDGs は 2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟 193 国が 2016 年から 2030 年の 15 年間で達成するために掲げた目標であり、17 の目標と 169 のターゲットからなる開発目標である。「極度の貧困解消」と「持続可能な世界」の実現を目指すことがその特徴として挙げられる。

SDGs は、国内での知名度が徐々に上がり、3 割程度の国民に普及しているといえる。領域で分けるならば、目標 1～6 が開発系、目標 13～15 が環境系、目標 7～12 が経済・社会系、目標 5・目標 10・目標 16 が理念系、目標 17 が実施体制という分類ができよう。また、SDGs が掲げる大目標に「No one is left behind！（誰ひとり取り残さない）」という言葉がある。これは、「一番低い層」へのアプローチ、すなわち、MDGs で達成しきれなかった目標が含まれている。

SDGs において重要な 3 つのキーワード：①包摂・共生 inclusion（⇔排除 exclusion）

②公正・公平 equity（→平等 equality）

③循環

### 4.SDGs と教育の課題

これからの学校には、SD をめぐる教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

## 5.ESD 型の学習の特徴

知識のみではなく、スキルや態度も大切に、将来の社会参加を見据えた参加型学習が中心となる。以下に紹介するのは、教科・領域をつなげたカリキュラム・学習形態の事例である。

### ○ワークショップ体験型の学習

- ・社会参加を作る場で、座学ではない参加型学習である。
- ・あくまで疑似体験であり、授業の中だけの参加である場合も多く、将来の社会参加につながるかどうか不明である点などが課題として挙げられる。
- ・教材としては、『世界がもし 100 人の村だったらーワークショップ版』・『新・貿易ゲーム』・『援助する前に考えよう』・『18 歳選挙権と市民教育ハンドブック』・『世界と私と未来をつなぐ授業づくりガイドー開発教育・ESD を教室へ』などがある。

### ○アクション・リサーチ型の学習

- ・地域を歩いて課題をさがす手法である。
- ・世界と地域を掘り下げるといふグローバルな視点を有しているといえる。

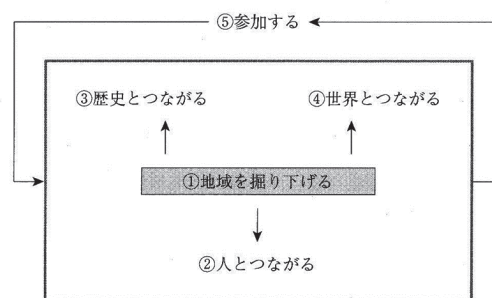


図 3-1 「地域を掘り下げ、世界とつながる」カリキュラム作成の視点

## 6.グローバル化と SDGs

グローバル経済が進むなかで、「経済」「社会」「環境」の調和がとれた社会は可能なのであるか。「公正」「共生」「循環」という 3 つの理念にも矛盾がある。効率化を求める傾向にある「公正」の価値は、包摂や循環との整合性を捉えづらい。また、「脱貧困・格差是正」などの問題は「多様性」という価値とも拮抗関係にある。

つまり、我々が考えなければならないのは、SDGs の課題間の矛盾と葛藤ではないか。経済と社会と環境のグローバル人材（スーパーグローバル）が求められる今日、グローバル人材育成における「ビジネス課題」と「社会課題」の矛盾と葛藤が浮き彫りになっている。

世界的な排除の問題（移民問題・宗教問題）を解決していくためには、多様な居場所が必要である。排除の構図は日本の中にもある。現在、企業に入る新入社員のうち、約 8 割が疲弊しているといわれている。つまり、経済活動に属さない居場所が重要であるといえる。

### ◆SDGs のスローガンの言い換え

だれも取り残さない Leave no one behind !

→誰にでも居場所がある社会 Make a world everyone has Ibasho !

## 指定討論

清野未恵子氏（神戸大学）を指定討論者とし、以下のような質疑応答が行われた。

### 指定討論者による質疑

- ・国内の学校教育の中での ESD (SDGs) は学習指導要領に掲載されたが、約 2 割の普及では社会変革がすすまないのではないか？
- ・SDGs の達成手段（プロセス）が ESD なのか？
- ・「SDGs が良いことだ」という発想には疑問
- ・SDGs の良さは SD を説明する上でわかりやすい（ロゴも含めイメージしやすい）
- ・居場所との関連になるが地域の問題（ローカル）と国際社会（グローバル）の開発教育の中の教育は同じか？

### 田中氏からの回答

国際的な問題も重要であり、世界で起きている問題を考えることが地域の課題に繋がる。商店街の活性化が取りざたされているが、シャッター商店街問題は大店法改訂が影響している。この改訂には大企業や国際企業が関わっており、地域課題は国際課題と深い関わりがあることが分かる。そこまで理解することが、地域の解決につながるというところに学習のポイントがある。SDGs を推進することで ESD のダイナミックな取組みが捨象されるのではないか。

### フロアからの質疑応答

さらに、田中氏の講演と指定討論をめぐって、フロアの参加者から質疑が寄せられた。その中から一部抜粋したものを、田中氏による回答とともに以下にまとめる。

Q. 『だれひとり取り残さない』という概念は数値の問題ではなく、ケースマネジメントのことではないか？

A. SDGs は途上国の課題のように聞こえるが、自分たちの活動とつながっていると頭を置き換える必要がある。

Q. SDGs の 17 項目は判りやすいが分断されたゴールではないか？

A. AI や環境問題も変わってきている。『価値観の変化』や『公平・環境・包摂』に学校の教育（現場）の活用は重要であると考えられる。

Q. 学校現場では自殺や不登校の問題が増えているが『居場所がない』のではないか？

A. 子どもも参画（自分たちが主体となる活動）し、子どもたちなりに主体として考えることを目的とするアクションリサーチを実践しており、居場所づくりの形を模索している。

Q. ESD を学校教育現場では教えるのは難しいのではないか？

A. 日本の教育は学校現場ではなく、社会の中にある。例えば、上尾東中学校では、地域とつな

がりながら授業を展開している。地域や企業、行政に生徒が積極的に訪れ、課題を解決しようとする。ここでは、アクションリサーチ型の授業を行ったことで、授業の中で子どもたちの居場所が見つかり、生徒が主体的に学ぶことにより、教員の対応にも変化が見られた。

以上

田中氏による講演と指定討論、全体での質疑応答を通して、持続可能性（SD）概念の系譜とSDGs普及の社会的背景についての理解を深めることができた。また、社会教育、開発教育をベースとした田中氏の実践とESD・SDGsの関係が語られたことにより、参加者は、「ESD実践研究」をより多角的に捉えることができたのではないだろうか。ここで基調講演としてESDおよびSDGsに関する重要なキー概念が提示されたことで、後に続く各プログラムにおける共通の視軸を有することができた。

文責：鴨谷 真（神戸大学 ESD 総合コーディネーター）

## ■ SDGs・ESD・人…様々な出会いの場としてのESDカフェ

木下 栞（神戸大学国際人間科学部）・宮本 貴生（神戸大学大学院理学研究科）

今回、ESDカフェのファシリテーターを初めて経験させていただいた。ESDカフェとは多様な参加者がそれぞれの経験を持ち寄り、出会いの面白さを経験するとともに、自分や社会との関係を気楽に考え話し合うものである。話し合うと言っても会議のような固い雰囲気のものではなく、カフェのような居心地の良い空間、人との出会いが自由な空間を提供することがESDカフェにおいて大切なことである。

今回のESDカフェは第4回ESD実践研究集会の1日目の最後のプログラムであった。参加者はESDカフェ開始までに、基調講演や指定討論を通して、ESDやSDGsについて1人1人考えを深めている。以上の前提を基に、今回のESDカフェでは2つのことを意識しながら企画・運営を行なった。1つは参加者が気楽に話せる場にする、2つ目は、2日目の実践研究集会が楽しみになるような時間にする、ことである。

そこで今回のESDカフェで行なったのはSDGsすごろくゲームである。これは国連広報センターがSDGsを楽しく学んでもらうことを目的に作ったものだ。一度試しにやってみたところ、このSDGsゲームの課題が見えてきた。

ESDカフェで行なうには、SDGsに対する様々な考えをこのゲームのままでは表現することができないことである。そのため、今回はこのSDGsゲームを改良し参加者にSDGsすごろくゲームの検証を行ってもらうことにした。SDGsの17の目標に関することを話すコマを用意する、参加者の個が出るよう、すごろくの目を数字に加え、好きなものを聞く質問にするなど、ゲームを楽しめる工夫を施した。また、出会いの面白さを感じてもらうためゲームを2回行った。1グループ5～6人で設定し、1回目はくじによる運命の出会いを経験し、2回目は1回目とは違う人同士になるように組んでもらった。それぞれのグループでどのような話があったのかは分からないが、会場には終始楽しく賑やかな雰囲気が漂っていた。ESDカフェの持つ楽しい空間を提供できたことは良かったが、出会いの数が少なかったことは反省点である。約70名の参加者のうち1人1人の出会った人数は10名ほどだ。出会いの数、質どちらを重視するのかは個々により異なると思うが、今回は大学生、RCE、一般の方など様々な人が参加していた。そのため、参加者の多様性を感じられる工夫が必要であったと感じた。また、個々のESDやSDGsに対する考えをこのゲームを通して深めることができたのか、2日目の実践研究集会に繋がる時間になったのかについては参加者の声を聞くことができなかったため、アンケート等を行なう必要があると感じた。

このESDカフェを通して言葉かけや会場の雰囲気作り、時間配分など様々なことを綿密に計画して行なうことがファシリテーターとして大切だと学ぶことができた。これからESDカフェのファシリテーターをさせていただく機会があれば今回の反省点を活かし、より自由な楽しい空間になるようにしたい。

## ■分科会報告

### 第1分科会

SDGs と人財育成～SDGs を広める・実現するための人づくりの仕組みとは～

清野 未恵子（神戸大学）

SDGs の 17 のゴールと 169 のターゲットは不可分であり、それらが統合された形で取り組むことが求められている。そのためには家庭・職場・地域・学校等の多様な主体が連携し、あらゆる場での学びと実践が求められている。まずは SDGs を理解し自分ごととして捉える人を広め増やしていく仕組みづくりが不可欠である。そこで第1分科会では、企業・行政・市民の様々な分野からの話題提供と参加者どうしの対話を通して、SDGs を実現するための人づくりの仕組みについて考えることとした。

第1分科会は、はじめに、「市民・地域」分野としてコープこうべ企画政策部環境推進統括・鬼澤康弘氏、「行政・NPO」分野としてNPO 法人しゃらく・大福聡平氏、「企業・組織」分野として水道筋商店街広報担当・江見真也氏の3名から、それぞれ話題提供をしていただいた。その後、分科会参加者を含めて3つのグループに分かれて「SDGs を実現するための人づくりの仕組み」について考えた。それらのふまえ、以下の3つを第一分科会からの提言とした。

#### 1. SDGs を共通言語にリーダーではなく身近なヒーローが子供でもわかるイベントを展開

SDGs の認知度が高まりつつあるとはいえ、誰もが SDGs を知っているとは言い難い。しかしながら、今やっていることの多くは SDGs で用いられている言葉に置き換え可能である。地域では、世界の潮流とは無関係に、コツコツとがんばっている人がいる。そうした人の活動を、SDGs の言葉に置き換えたならば、SDGs に関わる活動として再評価されうるかもしれない。そうした地域ベースで活動する人々が、「リーダー」や「ヒーロー」として再認識されるように、SDGs を使っていくという視点もあるのではないか。

#### 2. SDGs を意識させない多様な入口を設け実践（体験）をし、SDGs をフレームとしたリフレクションを通して、SDGs 無関心層を関心層に変えていく

様々な世代（幼児・小中学校・高校・大学・社会人）の実践の場では、しばしばリフレクションが行われる。そのリフレクションを、SDGs をフレームとしたものにするすることで、結果的に SDGs として意識化できるのではないだろうか。SDGs には実践が必要であるが、SDGs の実践として入り口を設けるのではなく、実践を終えてみたら SDGs になっていたという仕掛けで進めてみてはどうだろうか。

#### 3. 商店街を変えると世界は変わる。小さな世界変革を意識し、多様なやりがいを引き出せるような居場所づくり

商店街という小さなスケールの活動が、実は世界を変えるような可能性をもっている。だが、そうした小さなスケールでは、取り組みを牽引する側が少なかったり疲弊してしまったりして、活動の継続が困難な場合もある。そうした事態を避けるために、若い世代も牽引する側に参加できるような工夫をしながら、牽引する側がいろいろな形でやりがいや楽しさを感じられるような環境づくりが大切である。

## 第2分科会

SDGsを進める出会いの方法～ユースと多世代の交流をどう生み出す？～

堤 拓也（神戸大学大学院）

第2分科会では「SDGsを進める出会いの方法～ユースと多世代の交流をどう生み出す？～」を分科会のテーマに掲げ、はじめに、南あわじ市において大学生や地元企業、農家などに関わりながら事業を推進されている2525ファーム代表取締役の迫田瞬氏とマネージャーの井川翼氏、CSR活動の一環として地域密着型の様々な取り組みを進められているみなと銀行経営企画部SDGs推進室長の藤井英二氏、着付け教室の実施などを通して地域に出会いの場を生み出されているiEARN/あいくる”AICL”代表の福井良子氏とコーディネーターの野瀬彩弥氏にそれぞれの活動事例を発表していただいた。次に、ボランティア活動等を通して実際に多世代との交流を行っているユースコメンテーターからのショートコメントののち、9つのグループに分かれ、「ユースと多世代の出会い・交流の意義・可能性」、「ユースと多世代の出会い・交流の課題」という2つのテーマトークに取り組んだ。

1つ目の「ユースと多世代の出会い・交流の意義・可能性」というテーマについては、ユースと多世代の出会い・交流を通して多様な生き方や価値観に触れることができる、異質な人とつながることが包摂的な協働の基盤づくりにつながる、ユースと多世代の価値観が共有され世代間のギャップが埋まる、地域づくりにつながるなどの意見が述べられた。2つ目の「ユースと多世代の出会い・交流の課題」というテーマでは、そもそも出会い・交流の場がそこにいる人にとって楽しく魅力的な場となっているのか、また、それを共有し、広げていくための工夫はあるのか、ユースと多世代の価値観や温度差の違いなどのギャップをどう乗り越えていくのか、などの意見が出された。全体ディスカッションでは、ユースから「大人が設定した場への参加を促されるだけでは、伝統を保存するだけになってしまうのではないか」という疑問が投げかけられ、参加にまつわる「自主性」と「強制性」、「批判的思考」といったキーワードについての議論が行われた。ユースが活動に巻き込まれる、あるいは、ユースがあたかも活動の主役として不自然に持ち上げられるのではなく、ユースと多世代が先入観なく共に学びをつくりだしていくことが大切であり、そのような場をどのようにして創出していくことができるのかということが今後の課題として確認された。

### 第3分科会

市民社会とSDGs～地域住民・企業・中学生の視点から持続可能な社会を考える～

高田 知紀(神戸市立工業高等専門学校)

第3分科会では「市民社会とSDGs～地域住民・企業・中学生の視点から持続可能な社会を考える～」というテーマで、グローバルな目標としてのSDGsに対して、市民あるいは市民社会はどのようにアプローチすべきか議論した。分科会のプログラムは以下のとおりである。

話題提供：①森本アリさん(シオヤプロジェクト、旧グッゲンハイム邸管理人)

②脇濱直樹さん(大和ハウス)

③山崎美鈴さん、和田凛々子さん(神戸大学附属中等教育学校)

テーブルワーク

全体討論

話題提供では、まず森本アリさんが、神戸市垂水区の塩屋地区で「レディメイド」をキーコンセプトに、住民がまちにすでにあるものを使いながら積極的に楽しむ様々な取り組みを紹介した。脇濱さんからは、大和ハウスが企業として取り組む兵庫県三木市での郊外型住宅団地再生の取り組みについて報告があった。話題提供の最後は、神戸大学附属中等教育学校の山崎さんと和田さんが、消費しきれなかった食品を回収し、それらを必要とする施設などに無償で届ける「フードドライブ」プロジェクトについて紹介した。いずれの取り組みも、地域住民、企業、中学生のそれぞれの立場から持続可能な社会を実現するための具体的かつ重要な取り組みであることを参加者は共有した。

テーブルワークでは、話題提供者を中心に3つのテーブルをつくり、参加者がすべてのテーブルをまわりながら議論し、各取り組みのなかの重要なキーワードをファシリテータが書き出していった。その後、全体討論のなかで、持続可能な社会を実現するために重要なことについて、書き出したキーワードに投票する形で考えていった。

総合討論のなかで、SDGsとの関係で特に重要なキーワードとしてあがったのは、「枠からはみ出るものを大切にすること」と「目標を固定的なものにしない」ということである。SDGsはグローバルな共通目標として掲げられている。しかし、個々の具体的な取り組みのなかで大切にされていることがSDGsの項目に合致しているとは限らない。分科会の参加者が共有したのは、グローバルな目標には収まらない現場に固有の特性や価値を積極的に見出しながら活動を展開していくことの重要性である。また「目標はどんどん変わっていい」、「そもそも目標なんていない」という意見もでた。また、もうひとつの重要な論点は、持続可能な社会の実現に向けて市民ひとりひとりが行動を起こしていくためには、「自然発生的なプラットフォーム」が必要だということである。

本分科会では、グローバルな目標を見据えつつも、それに締め付けられることなく、目の前の暮らしを大切にしながら実践を積み重ねていくことの意味を多様な角度から議論することができた。

## ■自由研究発表概要

2日目午後実施された自由研究発表では、9名の発表者が3室に分かれ、「ESD実践研究」をめぐるプレゼンテーションが行われた。各自持ち時間は20分（発表15分、質疑応答5分）で、3名の発表後、各室で総合討議が行われた。発表者は、ESD推進ネットひょうご神戸のメンバーまたはメンバーからの推薦者である。以下は、各室の司会者による概要の報告である。

### 第1室報告 稲原 美苗（神戸大学）

第1室では、福井良子氏（JEARN/AICL）、山村けい子氏（兵庫大学短期学部）、土原翔吾氏（NPO 法人須磨ユニバーサルビーチプロジェクト）の3名がそれぞれの活動について報告し、それらに関わる質疑応答が行われた。

まず、福井良子氏は、「伝承文化を題材にした、クラス内、国際協働学習の効用」という題目で、自身が代表を務めるjEARNとAICLでの一つの実践について報告した。国際的な視野を持ちながら「伝承文化・芸能（特に神戸市北区の農村歌舞伎）」に着目することによって、若者（主に中高生）が地域に目を向け、ローカルからグローバルな課題を考える教育実践について報告した。次に、山村けい子氏による、「バングラデシュと日本の就学前教育における『共に生きる』ことを学ぶ教育的意義」と題した報告があった。多くの貧困や格差の問題を抱えているバングラデシュにおける就学前教育の実態調査の内容が紹介された。特に、持続可能な開発目標（SDGs）を踏まえて、バングラデシュと日本の就学前教育を比較し、貧困と教育との関係性について述べた。最後に、土原翔吾氏は、「『ユニバーサルフレンドリー』な空気をつくる～障がい者・高齢者が諦めていたことに挑戦し実現できる社会に～」と題して、自身が企画・運営に携わっているNPOでの活動報告を行った。土原氏の活動は、須磨海岸を障害者や高齢者、乳幼児を育てている保護者など、それまで海水浴を諦めていた人々も一緒に気軽に楽しめる海岸にしようというプロジェクトが紹介された。

これらの報告後、全体で質疑応答を行った。3名の報告のどれもが、人々が共に学ぶ・参加することや繋がりという点に着目していたため、これらの点にフォーカスした質疑が出された。その後、参加者全員で「共に活動するとは？」というテーマで対話をし、3つの報告の共通テーマであり、ESDの基本概念の一つである「共生」について深掘りできた。

### 第2室報告 津田 英二（神戸大学）

第2室では、3本の報告とそれに関わる討議が行われた。

1本目は鴨谷真氏（神戸大学）による、「高等教育におけるESDの推進課題とSDGsについて～神戸大学ESDコースの事例から～」と題した報告であった。全部局横断のESDカリキュラムを構造化し、また課外活動ともリンクさせることで、ESDに関わる深い学びを提供している神戸大学の実践が紹介された。2本目は、高尾千秋氏（ひらかた市民活動支援センター・Camp Life）による、「学校を核とした人のつながり（教育コミュニティづくり）」と題した報告であった。子どもから成人まで、市民の学びの場を広く提供している枚方市の市民活動支援

センターの取り組みや実践の構造が紹介された。3本目は、三苫利光氏（クラーク記念国際高等学校）による、「ハイブリッド・スクール（混合型教育システムの学校）の実践」と題した報告であった。ノンフォーマル教育やインフォーマル教育のエッセンスを取り入れることで、生徒に自由な選択的な学びの機会を提供しているクラーク記念国際高等学校の実践が紹介された。

3本の報告の後、全体討議を行った。3本とも学校教育と社会教育の境界に焦点を当てる報告であったため、討議もこの点をめぐるものとなった。フォーマル教育のメリットを生かしつつ、ノンフォーマル教育、インフォーマル教育の要素を組み込んでいく仕組みについて、学校教育が抱えている課題を克服して学習者が生き生きと学ぶための方法として議論がなされた。

### 第3室報告 渡邊 一真（ESD ボランティアばらばん）

第3室の発表者は堤拓也氏（神戸大学大学院）、池田拓也氏（灘中学校・高等学校）、三井規裕氏（関西学院大学）の3名であった。

最初に三井氏から「コミュニティセンターを中心とした住民参加型事業の現状と課題～A 地区の事例報告～」として住民の参加と行政との協働の難しさ、活動における「学び」への気づきの大切さについて、また、多様な住民の意見を聞く方法をもって地域の抱える課題を明らかにしていく必要があるとの発表があった。次に池田氏から「KOBE 高校生豪雨災害ボランティアチーム実践報告～高校生と現場をつなぐ学校や教員の役割を考える～」として発表があり、教員が学校だけで抱え込まず、社会全体で人を育てること。そのためには教員自身が市民として生きることが大切であるとの発表があった。また、活動した高校生（伊藤裕貴氏、山本ころ氏、飯森未悠氏）からも災害ボランティア活動をとおして「人見知りであった自分の変化」「次のボランティア活動につながっていった」など自身への気づきや変化につながったことが発表された。最後に堤氏から「グループワークの現代的意義と課題に関する一考察」として特に若者が非日常の空間において個人と集団の中間的存在である小集団（グループ）を単位として活動することの意義について発表がなされた。3名の発表の後、発表者とフロアで意見交換が行われた。

## 伝承文化を題材にした、クラス内、国際協働学習の効用 学校・地域での実践例を通して

福井 良子 (AICL、iEARN)

伝承文化は、その時々地域の住民が、暮らしを通じて地域の環境を認知・理解、評価し、様々な働きかけを行いながら築きあげてきた文化であり、それぞれの地域社会ならではの知恵と技を含んでいる。また、地域間交流・多世代交流、地域の子どもたちを育むなどの役割をもっている。

この伝承文化をプロジェクトとして、クラス内・海外との国際協働学習は、ESD/SDGs が掲げる「質の高い教育」の中の、自分の力で考え、自分たちの行動が、地球環境や周りの人たちに与える影響に気づき、未来のために、よりよい選択をすることができるようになる教育につながっているのではないかな。

3回おこなった実践例からこの可能性を考える。

実践1：2018年2月9日、16日神戸市立小部中学校 中学2年生 240名

実践例2：2018年12月6日、兵庫県国際交流協会 東北学院高等学校 3年生 20名

実践例3：2019年8月13日、14日 兵庫県国際交流協会 中学生～大学生(一般募集)

実践1：小部中学校の「総合」の時間を使って、中学2年の各教科の担任の教員の協力のもと実施。全体会では中学2年生240名にインドに伝わる伝承芸能「ブラカタ」神戸市北区に伝わる「農村歌舞伎 丹生歌舞伎」を紹介後今回のテーマと課題を提示した。丹生かぶきの歌舞伎衣装を持ち込んでパフォーマンスを見せてくれたことで、生徒たちの興味・意欲は高まった。

その後各クラスに分かれてグループ討議→課題の持ち帰り→1週間後の発表が行われた、興味深かったのは各教員の担当教科の違いのために、生徒への働きかけが違っており、その結果、それぞれのクラス内でのグループ討議の内容が多種・多様に広がりを見せたことだ。

実践2：ESD推進ネットひょうご神戸の参画団体が、修学旅行で神戸を訪れた東北学院高校生対象に行ったESD体験学習。当団体も20名を受け入れてiEARN(ICTを活用して国際交流学習を推進しているNPO)から数か国の協力で海外との交流学習を実施した。

実践3：一般を対象に参加者を募集した。結果中学生、高校生、大学生と多様な年代が参加した。2日間にわたるワークショップで2日目に海外との発表・交流を行った。

3回の実践とも参加者たちは短い期間でそれなりの学習を行い、発表を完成させたことは評価できる。協力してくれた国内外の学校・団体・教員たち支援と参加者たちの意欲の高さのお陰である。

しかし、実践例2と3で行った海外との交流で、海外の生徒たちから発表内容について質問を受けた時は、それが簡単な質問でも多くの参加者が答えることができなかった。これは、相手方(海外)の生徒たちも同じだった。どちらも思わず教員が代わりに答えてしまった。

時間が足りなかったことも事実であるが、発表を作ることに熱中するあまり、自分たちのテーマへの取り組み上部だけになっていたことが明らかになった。質問に答えられなかった参加者は、戸惑いを見せ、落ち込んでいた。この経験は次回、よりよい発表を作る意欲になった。これは実践1での学校内だけの学習・発表では見られなかったことである。

海外と交流学習したことによる発見だった。海外からの全く違う視点からの考えを取り入れて、再度発表原稿を作ると、彼らの学びの質は、より深く、より向上してゆくだろう。iEARN国際協働学習は、この学習形態を確立している。その活用を今後も広めてゆきたい。

# バングラデシュと日本の就学前教育における 「共に生きることを学ぶ」の教育的意義

—SDGs 4.2 の観点から—

## Educational significance of "learning to live together" in pre-primary education of Bangladesh and Japan

—Based on 4.2 of the sustainable development target (SDGs)—

山村けい子（兵庫大学短期大学部）

### 1. 背景

乳幼児期は、子どもの人間形成の基礎をつくる大事な時期である。そしてその時期には多くの人との関わりがあり、その中で人間形成を築いていく。子どもを取り巻く人間関係の中で教えられたり、みずから学ぶ中で「生きていくこと」の基盤を身につけていくのである。

1997年、教育国際委員会報告書には、『学習：秘められた宝』生涯学習の視点から人類発展のための教育の在り方を幅広く検討し提言している。」とある。そして「知ることを学ぶ」、「為すことを学ぶ」、「共に生きることを学ぶ」、「人として生きることを学ぶ」という生涯学習が続けるとい教育方針、4本の柱が唱えられた。

その後「万人のための教育(EFA)」、またダカール行動枠組みにおいては、「最も恵まれない子供達に特に配慮を行った総合的な就学前保育・教育の拡大および改善」が掲げられ、途上国においても乳幼児のケアと教育 (Early Childhood Care and Education, ECCE) は、色々と取り組みをしてきた。2000年のMDGsを経て、2016年に入るとSDGs4.2の「2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、質の高い早期幼児の開発、ケア、および就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする」のように17の開発目標 (SDGs) 掲げた。

### 2. 研究目的

現在、日本においては、都市化することによって持たされた地域関係、近隣関係の衰退は、地域の子ども関係の衰退化のもつながっている。

農村地区のような大家族は少なくなり、核家族、少子化によって家族の規模も縮小型の一途を辿っている。

これらの背景により、昨今では、人間関係を育てる環境の力が弱まってきているのは明白であり、子どもの「人間関係」が希薄になってきていることは、現実問題としておおいに懸念される点である。

バングラデシュでは、貧困や就学前教育率に関しては、十分ではない。2 国間では国の背景こそ違いはあるが、乳幼児を取り巻く人間関係は、「生きていく」ことにおいて、「(他者と)共に生きることを学ぶ」ことの意義は、大きな差異はあるのだろうか。

また、「教育」とは、どのような役割があるのであろうか。今回はバングラデシュの障がい者問題に取り組んでいる NPO の ADD (Action on Disability and Development) を訪問し、Country Director に話を聞いた。

SDGs の 4.2 を基盤にこれらの課題について考察をしていきたい。

### 3. 研究方法

①・2018年1月12日～16日

・2018年7月14日～21日

Pre-primary school の実態を参考にする。

②・2019年7月13日～21日

Pre-primary school 2 か所訪問

ADD Action on Disability and Development) を訪問した。

11:00～12:00 (Dhaka) インタビュー

これらを総合して考察をする。

## 障がい者・高齢者が諦めていたことに挑戦し実現できる社会に 3年目の夏を迎えたユニバーサルビーチの展開

あふれ出た教育者 つっちい  
須磨ユニバーサルビーチプロジェクト

1. 障がい者をめぐる課題を解決に導く手法の開発—「できないをできた！」に

障がい者は自然を楽しむ選択肢が少なく、諦めないといけないことが多い。そして、障がい者と健常者を区別する壁がある。日常生活において、「差別や偏見を受けた」と感じている人は**59%**、**障害者差別解消法が社会に「浸透していない」が92%**、**障害者差別解消法の施行以降も、差別・偏見が「改善していない」が89%**。**(2016 障がい者総合研究所調べ)**

この現状と課題を、アウトドア系アクティビティを一緒に楽しむことにより解決を目指すのがユニバーサルビーチプロジェクト(UBP)である。車椅子当事者の木戸がリハビリのため訪れたゴールドコーストでみた、障がい者と健常者が一緒に遊ぶという、発表者が世界観を導入したいと考えた。「できない」ことが「できた！」の達成感と感動は、諦めていたことや次への挑戦の糧となる。

2. 潜在的な支援者の発掘—人が人を呼ぶ

アウトドアのための福祉補助具も日本には少ないので、水にも浮かぶ水陸両用で誰もが押したくなる車イス『ヒップキャンプ』と土や砂でも車イスが可能になる特殊なマット『ビーチマット』を輸入して導入。資金も非常に高額で、組立や設置に人手がかかるため、当初は難しいと考えていた。しかし、その困り感のため多くの市民が主体的に関わることに繋がった。

初期のクラウドファンディングと寄付の合計金額は**210万円**。ひと夏のユニバーサルビーチの利用者は**128組 426名**。**(2019年、須磨全体は24万人。2018年は136組 328名。須磨全体は45万人。神戸市港湾局調べ)** 須磨UBPでの年間の関係人口は**2000人**を超える。

また、発達障害を抱える子どもボランティア

も来てくれており、一緒に活動する大人たちに認められることにより自信を持ち、学校での生活もよりよくなっていっている。大人も誰もが認め合える居心地の良いサードプレイスとして何回も訪れる方も多い。

3. 神戸での独自性 - 全国への展開

須磨UBPで、神戸市の委託を受けて運営をしている障がい者利用施設にて、ユニバーサルビーチと施設を利用された方を対象に2018年度にアンケートを行った結果、**今後利用したい人が99%**、**利用の満足で不満と答えた人がいない**、**須磨以外でも同じようなビーチがあればいい100%**、**ユニバーサルビーチの神戸市在住者利用者の認知度は23%**、**神戸市外認知度は47%**であった。ユニバーサルビーチは神戸市にしかないので、神戸市外から、遠くても足を運んでくれている。その現状をうけて、きょうだいプロジェクトが2019年に愛知県と徳島県で発足した。その他、須磨での出会いをきっかけに生まれた企画やプロジェクトも複数ある。

本プロジェクトは、**3・4・8・10・11・12・14・15・17**のSDGs項目を満たすと考え、大阪で開催されたSDGsビジネスコンテストに出場し、約**200社**中の最優秀賞を受賞した。

4. これからの展開—目指すビジョン

**障がい者・高齢者が諦めていたことに挑戦し実現できる社会をつくることを目指す。**

生産年齢人口減少が深刻化する地方で、障がい者・高齢者に余暇のアウトドアの場を与える。そこでの達成感ときっかけから仕事にまで活躍の場を広げ、障がい者・高齢者を戦力化する。一緒に過ごすことが当たり前になることで偏見もなくなり、より持続的なまちづくりとそれに伴う充実した教育ができると考えている。

## 高等教育における ESD の推進課題と SDG s について

### ～神戸大学 ESD コースの事例から～

鴨谷 真（神戸大学大学教育推進機構）

#### 1. 大学での ESD の推進と SDG s の背景

現在、多くの大学で SDG s に関する取り組みが始まり、企業も SDG s を謳う事で、企業価値を高めようとする傾向が顕著である。SDG s の広がりには 2030 年に向けさらに加速すると思われる。しかし本来 SDG s の目標は独立したものではなく、相互に関係し、時に相反する価値を追求するものである。ここに SDG s 問題解決に向けての考えを深め、地域や日常生活に存在する具体的な課題とつなげて考え、身近なものとして捉えて行動までつなげる ESD の推進が不可欠である。ESD は SDG s 達成のために欠かせないものであり、その関係は本来不可分であると考ええる。持続可能な社会の担い手づくりを行う上で高等教育に課せられた課題は大きい。

#### 2. 神戸大学 ESD コースの現状

神戸大学 ESD コースは、各学部間及び学内外の組織と連携しながら、環境・貧困・平和・人権・福祉・健康問題などの幅広い観点を組み込んだ ESD を、アクション・リサーチ等の手法によって全体的に理解するとともに、その推進者としての力量を形成するための学修コースである。細分化した学問領域ごとに取り組むのだけでなく、学際的に多様な学問領域を総合化して取り組むことを促している。現在 11 学部あるすべての学部生が ESD コースを履修でき、基礎科目は 1 科目 200 名を超す人気の科目となっている。履修生は多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを取る力、他者と協力する力、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力(バックキャスト)、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度(自分ごと)など、ESD の視点に立った能力・態度を培う。

#### 3. ESD 推進の課題

神戸大学 ESD コースは「学際的に多様な学問領域を総合化して取り組む」ESD に則ったカリ

キュラムが特徴である。基礎科目は、様々が学部の ESD に取り組む教員が授業を担当する非常に充実したコース内容が特徴であり、ここから ESD への理解を深める。しかし、主な履修生は新生で ESD という言葉自体、履修生の 1 割程度しか認知がなく、「ESD とは？SDG s とは？」という概念から授業に入る。こうした状況では、やはり「見える化・誰でも取り組みやすくするための仕掛け」である SDG s が受け入れやすい。ESD は SDG s 達成のために欠かせない本来不可分なものであるが、履修者は一つ一つの SDG s 目標や、ESD・SDG s という言葉やその表記を広めたいと考える傾向がある。つまり SDG s の表面的な理解でカリキュラムが終わっているのではないだろうか。また、更に、卒業時に専門的な知識を得た学生が ESD コースを通じて、ESD や SDG s の理解が深まったか知るすべはない。200 人を超える履修生の数が、理解を深める障壁にもなっている。

#### 4. ESD 推進に向けての考察

これからより多くの大学で ESD や SDG s を学ぶ学生が増えると思われるが、現実の社会ではすでに SDG s と名乗らないまでも、SD に向けた地域活動や、国を越えたつながりを実践する仕組みが進んでいる。それらの活動を SDG s に分類することで、「SD が進んでいる。SD を推進している」と考える風潮はいかがなものだろうか。高等教育で ESD を推進する上で、実際の事例や、活動が行われている現場、人との関わりをしっかりと持ちながら、表面的な理解にとどまらず、一方でこれらを批判的な視野で見る力や多面的・総合的に考える力を持つ必要を感じる。SD の 1 つ 1 つは古くからある学問であり、それを束ねた SDG s はまだ日が浅い領域である。

## 学校を核とした人のつながり（教育コミュニティづくり）

### 地域教育協議会（すこやかネット）の活動に関する調査研究

高尾千秋（すこやかネット研究会・Camplife）

本研究では、2018年に筆者が共同研究として実施した大阪府が推進する「地域教育協議会（すこやかネット）」の調査研究から教育コミュニティづくり現状と課題を報告する。

#### 1. 教育コミュニティとは

教育コミュニティは、「学校と地域が協働して子どものことを考え、具体的な活動を展開していく仕組み、そして、そこでつくられる新たな人のつながり」である。大阪府の施策実践を先導した故池田寛大阪大学教授が提唱した。学校・家庭・地域のそれぞれが垣根を越えてつながることにより、子どもと大人のふれあいを回復し、地域の教育力全体を高めることが教育コミュニティづくりの主たる目的である。

#### 2. 地域教育協議会（すこやかネット）

教育コミュニティづくりを推進するための施策として、大阪府では、2000年度より「総合的教育力活性化事業」を開始し、府内中学校334校区（政令市を除く）に「地域教育協議会＝すこやかネット（愛称）を設置した。すこやかネットは6年間の限定事業とされたが、府の財政状況から2007年度末で府からの補助金が途切れて、その後は各市町村にゆだねられることになった。<sup>1</sup>

#### 3. すこやかネットの活動に関する調査研究

2017年に「すこやかネット研究会」を立ち上げ予備調査を実施後、2018年に府内225校区へのアンケート調査とその結果を受けて7校区へのヒアリング調査を行った。大阪府内288中学校から「すこやかネット」が継続されている225校区（政令市を除く）の組織を対象とし郵送調査を実施した。

回答校区数が118校区、半数を超える回答を得た。単純集計からの漠然とした認識になるが、全体として肯定回答が多かったとの印象を持った。活動拠点が少ない・確保されていない点や認知度の低さや発展性の課題なども見えてきたが、想定した以上に活動が継続されていることが分かった。ただ、未回答校が半数近くあり、回答が得られない校区は回答校区以上に厳しい現状にあるではと考えている。事業開始から今年で20年を迎えることになる。行政の財政状況が厳しい中でも半数の学校では課題を抱えつつも教育コミュニティづくりの意義を持って取り組まれている状況にあるといえる。この結果からも、近年府内各市町村において、総合教育会議の設置や教育振興基本計画の策定が進んでいるが、基本計画に「教育コミュニティづくり」を挙げている市町村は18、「地域教育協議会」を含めると22市町となっており、大阪府内での教育コミュニティづくりは、確実に根付いてきている。

#### 4. 地域学校協働活動とコミュニティ・スクールへの動向

学校と地域の連携・協働の役割が改めて注目されている。2017年3月社会教育法改正により、「地域学校協働活動」が位置付けられた。「地域学校協働活動」とは、「地域と学校が連携・協働し、幅広い地域住民や保護者等の参画により地域全体で子供たちの成長を支え、地域を創生する」活動であり、池田が提唱した教育コミュニティづくりである。

これと並行し、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）も2017年4月に施行された「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により、努力義務化とされ、地域学校協働活動と一体的な推進が全国的に進められる。

<sup>1</sup> 学校支援地域本部・子ども教室等の文部科学省予算を充当、組織への直接の助成は各市町村の判断となっているが、現状は半数程度が助成を継続している。

# ハイブリッド・スクール(混合型教育システムの学校)の実践

## S・H・R の観点から見た令和時代の高校教育

三苫利光

(クラーク記念国際高等学校 三田分室)

主旨 令和時代の激変する社会で、生徒一人ひとりの自立を目指す新しい枠組みの高校教育は、実社会・大学と関わりを持ったハイブリッド・スクール(混合型教育システムの学校)であると考え、その時代背景から必要性を説明し、その実践を報告する。

### 1. 平成の4大教育問題

①不登校児童生徒の増大 児童生徒144,031人 高校生49,643人(平成29年度)

②高等学校中退者数の多さ 46,802名(平成29年度)

③学卒離職率の高さ

中学卒:98.6%進学-1.4%就職→離職率62.1%/高校卒:70.2%進学-17.2%就職→離職率39.2%

短期大学卒:17.2%就職→離職率39.9%/大学:12.0%進学-74.5%就職→離職率31.0%

④自己否定する児童・生徒・学生数の増加(平成30年度 年間812人)

児童7人/中学生124人/高校生238人/専修学校生他107人/大学生336人

### 2. 不登校生徒一人ひとりとの対応から見てきたこと

不登校を経験した生徒の多くは、性格は素直で真面目、とすれば生真面目で、正義感が強く、繊細であるが豊かな感性を持ち、その魂は純粹、ピュアである。この真面目で素直な子供を育てた保護者の子育ては間違っていない!

### 3. 生産労働人口が半減する2070年以降も生きる必要な力は、自立する力

自立する力とは、実社会で自分らしく、できれば楽しく、何らかの役割を担って、70年以上生き(働き)続ける意欲あふれる力であるとすれば、自立する力は、学校(皆勤)では身につかない。たとえ、その学校で憧れの教師に出会い、毎日登校でき、皆勤になったとしても、3年間の高校生活は、社会へ出るための通過点に過ぎず、彼らが自立した人生を生きるのは、70年以上続く実社会である。実社会には魍魎魍魎も住む。その前に憧れの社会人に多く出会い、その純な魂をたくましく、しなやかにしておくことには意味があり、感性豊かな高校時代にこそ、実社会と関わりを持った質の高いハイブリッド(混合型)高校教育が必要である。

### 4. ハイブリッドスクールの試み(全日制学年制高校ではなく、通信制単位制高校の取り組み)

①キャリア・ハイブリット:高校の学習+数週間から数ヶ月、実社会で就業体験学習をする

②ローカル・ハイブリット:高校の学習+毎週地域の事業所で学び、地域の課題を考える

③カレッジ・ハイブリット:高校の学習+毎週大学で専門の講義を受ける

④グローバル・ハイブリット:国内の高校生活+海外留学(異文化体験)をする

⑤ジェネレーション・ハイブリット:同室(質)の人間関係+多世代との交流

### 5. 成果 変容的学習に成功した生徒たち

①キャリア・ハイブリッド1ヶ月/Tくん:小3より起立性で不登校・同志社大学現代スポーツ

②キャリア・ハイブリッド2ヶ月/Nくん:高1転学・自由行動・甲南大学法学部

③キャリア・ハイブリッド2ヶ月/Sくん:中学3年間・引きこもり・和歌山大学観光学部

④カレッジ・ハイブリッド6ヶ月/Nさん:中1.3不登校・神戸市内貿易会社就職

⑤キャリア・グローバル・ハイ各1ヶ月/Nさん:小5より不登校・神戸女学院大学人間科学部

### 6. 課題 ハイブリッドスクールは、全日制、学年制高校でも機能できるのか。

## グループワークの現代的意義と課題に関する一考察

### グループワークの歴史的変遷に注目して

堤 拓也（神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程）

#### 1. 分断社会におけるグループワークの可能性

日本において若者の社会的孤立の問題は、高度経済成長期における急激な都市化以降、青年教育における重要な課題とされてきた。社会の分断がますます進む現代において、若者たち自らが社会的孤立の状況を乗り越え、さらには、今日進行しつつある地球的諸課題を解決するための主体となっていくためには、どのような実践が求められているのだろうか。

本発表では以上のような問題関心にに基づき、グループワークに関する歴史的変遷を踏まえ、その現代的意義と課題に関する考察を行う。

#### 2. グループワークの歴史的変遷

グループワークの源流は、イギリス、アメリカにおける YMCA 運動やセツルメント運動に遡る。その後、これらの運動は社会改良的側面から青少年への指導的側面を強めていき、次第に、グループワーク団体と称されるようになった。その後、グループワークは、1946年のグレース・コイル (G. L. Coyle) の講演以降、ソーシャルワークのとしての性格を強めていった。

戦後の日本では、アメリカからのグループワークの輸入を経て、活動の自主性と実践との結びつきを強調した共同学習論が展開された。さらに、戦後の抑圧的な社会状況下において「人間性の回復」あるいは「人間性の解放」のためのサークル運動が進められた。しかし、高度経済成長期における社会の変化の中で、これらの小集団活動は衰退していくこととなった。

1950年代以降、アメリカでは、また異なる出自から生まれたグループ・アプローチの理論化が進められていた。例えば、カール・ロジャーズ (C. R. Rogers) は、エンカウンター・グループを理論化し、クルト・レヴィン (Lewin, K. Z) は、Tグループの原型を発見した。これらの理論は、野島一彦や国文康孝らによって日本に輸入され、日本のグループワークに影響を与えた。

#### 3. ワークの再位置付けの必要性

グループワークの源流には、本来、社会改良的な側面と個人の成長的側面の2つの側面があった。グループ内のエンパワメントは、そのグループがグループを取り巻く環境に影響を与えることなくして実現しないというのが、コミュニティ・エンパワメントのモデル (Schulz, 1995) であるが、社会的課題との距離が開き、地域課題が見えづらくなった現代において、どのようにしてワークそのものの意義を見出し、社会的な影響力を獲得していくのかという点は大きな課題だと思われる。また、その際、ボランティアワークと集団づくりとしてのグループワークを結びつけていた学生セツルメント運動やワークキャンプなどの実践は、コミュニティ・エンパワメントのモデルに近いと思われる。今後、検証を進めていく必要がある。

#### 4. 相互交流を生み出すための場づくり

アメリカで1950年代以降に発展したグループ・アプローチの理論、特に、構成的グループ・エンカウターのエクササイズは、現在のワークショップにおけるアクティビティとして取り入れられるなどして、日本のグループワークに大きな影響を与えている。しかし、その中心的原理である本音の表出や相互交流、いまここにある自分自身の内面や人間関係の省察を通した学びという側面には、どれほど注意が払われているのだろうか。コミュニティの解体が進み、より一層人間関係の構築が難しくなりつつある現代社会において、改めて、一時的であれ、本音を表出することのできる集団づくりは必要とされている。日下 (2015) は、フィリピンにおけるワークキャンプの非日常空間について、ヴィクター・ターナー (V. W. Turner) の「コムニタス」の概念から説明したが、どのようにして、本音を表出できるような特殊な場を生み出せるのかということも課題の一つである。

## 「KOBE 高校生豪雨災害ボランティアチーム実践報告

### ～高校生と現場をつなぐ学校や教員の役割を考える～

池田 拓也(灘中学校・高等学校)

昨年7月の西日本豪雨災害を受け、勤務校の生徒から「倉敷市真備町にボランティア活動に行きたいから、学校でバスを出してもらえないか」という申し出があったのが1学期の終業式前日。諸般の事情で学校としての「ボランティアバス」の運行は見送ることになった。しかし、私自身、これまで東日本大震災や丹波水害などの現場に出かけ、高校生とともにボランティア活動を行った経験があり、被災地支援のボランティアが持つ「教育力」に強い関心があった。そこで、なんとか心に火のついた生徒の想いを形にしたいと考え、関係各所でボランティアバス運行の方法を探ったところ「被災地NGO協働センター」やなどのご協力でバス運行ができる目途が立ち、広く神戸(兵庫)の高校生を募って、「KOBE 高校生豪雨災害ボランティアチーム」として岡山県真備町で、ボランティア活動を行うことにした。昨年8月よりこれまでに四回の活動を実施し、のべ200人余りの高校生が参加した。

なぜこんなに多くの高校生が参加したのだろうか。募集にあたっては、学校や教員の持つ「力」が大きかった。学校や教員が災害に限らず「ボランティア活動」の現場に生徒を送り出すことには大きな意味があると思う。今回の経験から、高校生をボランティア活動につなぐ、学校や教員の役割について考えてみたい。また、実際にボランティア活動に参加した高校生の声もお届けする。

# コミュニティセンターを中心とした住民参加型事業の現状と課題

## ～A地域の事例報告～

三井 規裕 (関西学院大学)

### 1. 背景

A町は人口減少、高齢化、未婚率上昇、女性の就労意欲の上昇、産業の衰退等さまざまな変化の中にある。立地は福知山市と出石の間であり、山に囲まれ自然豊かな場所にある。一方、隣接地域に比べ地域の資源が乏しい。中山間地域であるため、大規模で効率的な農業は難しく、高齢化の影響から耕作放棄地も年々増えている。

	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2015
豊岡市	96,086	94,163	93,859	92,752	89,208	85,592	82,250
旧豊岡市	47,712	47,244	47,742	47,308	45,997	44,598	43,375
旧城崎町	4,958	4,748	4,592	4,345	3,973	3,778	3,519
旧竹野町	6,306	6,018	5,880	5,751	5,444	4,973	4,496
旧日高町	19,325	18,822	18,666	18,410	17,697	17,242	16,609
旧出石町	11,204	11,001	10,917	11,207	10,824	10,259	9,996
旧但東町	6,581	6,330	6,062	5,731	5,273	4,742	4,255

表1 現豊岡市と合併前の旧市町村別総人口の推移 参考) 豊岡市地域コミュニティビジョン (素案)

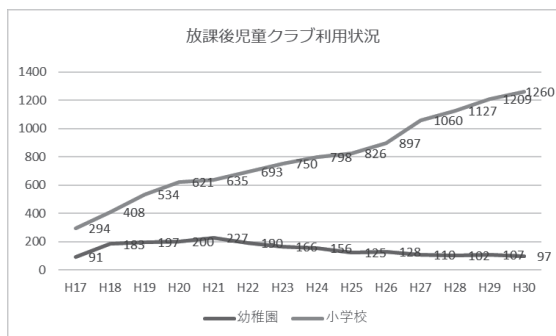


図1 参考) 豊岡市地域コミュニティビジョン (素案)

### 2. 現状

コミュニティセンターを中心に据え1)「地域振興」、「地域福祉」、「地域防災」、「人づくり」の4つを重点的に取り組むという方針がある。A地域では重点項目ごとに部会をつくりスタートした。当初は全体的に活発であったが、ここ2年は、「人づくり部会」のみが持続的に活動している。なぜそうなっているのだろうか。他の部会の活動が停滞している状況について現状を把握することは、今後の共同に必要な。

### 3. 目的・方法

夏の地域住民参加型事業に参加し、地域住民と共に活動し、その地域の現状を把握する。今回はB大学の学生の協力を得て、1)大学生による地域の子どもたちへの学習・スポーツ活動支援 2)夏祭り準備・運営・片付け全般の手伝い等を2泊3日で行った。期間は短い地域住民、特にコミュニティセンターに関わっている方との会話を通じて、状況を把握するよう努めた。

### 4. 把握できた現状と考察

地域住民やコミュニティセンターにかかわっている方達との会話から把握できたことは主に次の3点である。

1)事業を実行する人の不足 2)地域コミュニティ活動目標が共有しにくい 3)行政との連携が弱くなってしまった。

他地域でも 1)に関する事は指摘されており、中山間地域での地域活動の担い手不足は深刻である。活動の担い手不足もあり、コミュニティの活動目標を浸透していくための、多様な住民が参加し話し合う場は準備できていないようである。そのような状況の中で、行政職員の異動があり、円滑な連携活動がやや停滞してしまっている。こうした状況もあり、中心的に活動を担ってきた方々が疲弊してしまっている。現状では把握できた要因だけを見ているとそれぞれが連動しており、負のパターンを形成してしまっているかに見える。将来の住民の主体的な参加を目指し、疲弊している状況を改善しつつ、多様な住民の意見を聞く方法をもって地域の抱える課題を明らかにしていく必要がある。

参考: 阿部治 2009「持続可能な開発のための教育」(ESD)の現状と課題 環境教育 19(2)21-30

## ■全体シンポジウム：私たちの提案～行動プランと大切なこと～

2日目の午後、15時30分から18時までの間、午前中の3つの分科会からの提言を元に、野崎代表をモデレーターとして、本集会の主題である「SDGsとESDの関係～私たちはどう行動するのか？」をめぐる総合討議が行われた。参加者は、80名弱であったが、高校生、大学生からNPO関係者、大学関係者まで、幅広い層の参加を得て、熱心な討議が繰り広げられた。3つの分科会からの提案を再掲すると、以下のとおりである。

### 第1分科会の提案

- ・SDGsを共通言語に、子供でもわかるイベントを展開していくうちに、リーダーではなく身近なヒーローがうまれていく仕組み
- ・SDGsを意識せずに多様な入口を設け、実践（体験）をしてもらい、SDGsをフレームとしたリフレクション（兵庫発！）を通して、無関心層を関心層に変えていく
- ・商店街を変えると世界は変わるというような、小さな世界変革を意識し、小学校から大人まで、多様な世代のやりがいを引き出せるような居場所づくり

### 第2分科会の提案

- ・ユースの成長の視点を大切にす …学んでほしい／学びたい視点をしっかり示す
- ・ユースと一緒に、共に創り上げる …「待てること」「任せること」
- ・世代間のコミュニケーションが基本 …双方が「決めつけない」姿勢で（脱先入観）
- ・何でも話せる空気感をつくる …新しい人を巻き込むには「内輪感」の脱却

### 第3分科会の提案

- |                  |  |
|------------------|--|
| GOALについて         | <ul style="list-style-type: none"><li>・枠からはみ出るものを大切に</li><li>・豊かさの多様性について考える</li><li>・目標を固定的なものにしない</li></ul>                |
| きっかけ・モチベーションについて | <ul style="list-style-type: none"><li>・若者の疑問が世界を変える</li><li>・時間→自分にできること→仲間→楽しみ→精神の変化</li><li>・言い訳をしない、できない理由を探さない</li></ul> |
| 実践のしくみについて       | <ul style="list-style-type: none"><li>・自然発生的なものを生み出せるプラットフォーム</li><li>・メリット・デメリットの転換への視点</li></ul>                           |
| 実践の主体について        | <ul style="list-style-type: none"><li>・企業と住民の関係性、(企業として)住民を巻き込む</li><li>・伝える(世代)</li><li>・学生も社会人の一員</li></ul>                |

まず、これらの提案が、各世話人代表から約5分程度でプレゼンされ、次に、小人数単位（5～6人）で、改めて私たちのめざすべき「行動プラン」と「大切なこと」をまとめるワークショップが行われた。その後、グループでの話の内容を全体で共有しつつ、参加者は、SDGs運動とESDの異同を考え、さらに、どのような観点が重要であるのかを探り、「われわれは何をすべきか」を検討した。元より、統一的な行動目標を打ち出すことがねらいではなく、それらを考究することを通して「いかにあらゆる人がこうした運動の主体になりえるか」を多角的に考えるための方法論であったため、まとまった結論は得られなかったが、まさにプロセスにおいて多くの示唆と学びが得られたように思われる。

とりわけ、重要だと思われるのは、「ユース」「ヒーロー」「プラットフォーム」の3つの言語とそれらをめぐる刺激的な討論であろう。

「ユース」は、国連の活動ではよく使われるキーワードであるが、高校生・大学生から、「なぜユースというカテゴリーが生まれているのか？ ユースに何が期待されているのか？」といった、ユースの意味と意義についての問いが提起された。むろん、ユースは、権力集団によってうまく使われる集団ではなく、柔軟性・積極性の高い人間集団、平たく言えば、「しがらみの少ない自由人の集まり」として注目される。高校生たちからも、「もっとユースに任せてほしい」という頼もしい意見が出た。その一方で、逆説的であるが、歴史とシステムのなかで酸い甘いを経験してきた人たちとユースが一定の緊張関係のなかで、「こちらを立ててれば、あちらが立たない」といわれる複雑系の問題を協働的・共同的に解決していくような仕組みづくりの必要性も指摘された。

「プラットフォーム」は、そうした問題と関連して注目されるキーワードである。SDGsでは、「Goal17 パートナシップ」を生み出す場と捉えられているが、本集会では、実践のプラットフォームだけではなく、「学び合いのプラットフォーム」の意味が強調された。

さらに、ESDの運動のなかでは、「地上の星」ともいえる小さなすばらしい活動が大切にされてきた。地球規模で大きな影響力を与える活動だけではなく、生活の足元で生まれようとしている「新しい動き」を、コツコツと進めている目立たぬ実践者、すなわち、「地域・地元のヒーロー・ヒロイン」を見つけ出し、「世の光にする」ことが大切ではないかとの意見も出た。世の光を当てるだけではなく、彼ら自身が世の光になるような環境づくりが求められるということであろう。

限られた時間であったため、二日間に及び集会のなかで参加者が感じ取り、考え深めた豊富な内容を、十全に総合化することは、もちろん不可能であった。しかし、ESDの本質である「出会いと交流」をまさに体現した集会の一定のまとめとしての役割は、果たせたのではないだろうか。少なくとも、「持続可能な開発を夢に終わらせないためには、われわれが、具体的に何かをしなければならない」という意識の共有はできたように思われる。今後、それが意識レベルにとどまるものではないようにしなければならないのだが。

文責：松岡 広路（神戸大学）

## ■リフレクションワークショップ

2019年11月5日(火) 19:00~21:30、第4回ESD実践研究集会の反省会・創成会議が実施された。24名が、神戸大学Dルームに集い、準備段階・2日間の集会をめぐってふりかえり、次回のESD実践研究集会や今後の活動についての思いを出し合った。以下は、その内容をまとめたものである。

### ポスター発表について

- 椅子移動方式はスムーズに進み、聞き手の動き方はよかった。
- ゆっくりと参加者の人と話すことができた。
- 例年よりも一般の方が多く、熱心に質問をしていた。
- ふつうの発表の域を超えるのは難しい、なにかしら工夫がいるだろう。
- ポスター発表を冒頭にもってきた背景には、RCE兵庫-神戸がやっている活動が分かり、これらを重ね合わせるとESDにつながるということをイメージしてもらうためである。そのような観点で見たときに、何が言えるかをまとめる必要がある。
- ESDとの関連がわからないような発表もあったのではないか。

### ESDカフェについて

- 自分の実践を深める場というよりも、参加者がどういう関心があるかを自然に共有できる場だった
- 準備時間が駆け足だった。
- 楽しく話すということを出し過ぎていたので、ESDをキーワードにした話をもっとできたらよかった
- 交流の方法としての「スゴロクゲーム」は、手の不自由な人がいて、スムーズに進められないという問題があった。また、同じカードを引いて、同じ問題が何回も来るということがあった。
- スゴロクに一所懸命になり、それ以上のこと(討議・話し合い)がなかなか難しかった。
- スゴロクゲームのあと、話す時間があつたらよかった
- スゴロクのこまがしっかりしてなかった

### 分科会について

第1分科会：SDGsと人財育成 ～必要なのは教育？マネジメント？行政？～

- ゆるやかな空気感のなかで話げできた
- 内容と選んだときの自分の思いとマッチングしていない部分もあったが、提案としてよいものが出せた
- WS世話人の準備期間の話し合いの積み重ねがよかった
- 誰でもヒーローになれるというキーワードが印象に残った。

●企業の方など様々な人がいるなかで共通の話題で話すのが難しかった

第2分科会：SDGsを進める出会いの方法 ～ユースと多世代の交流をどう生み出す？～

○ユースコメンテーターの参加が特徴的であった

○ひとのエネルギーを感じることができた

○2525ファームからは、成功体験が話されると思っていたが、地域の人と一緒にやる際の苦労話(地域の慣習の理解など)もあり、よかった

○次につながる期待を生むものであった

△M銀行の方から話があったが、SDGsを進めていくうえで強引さがあり、この指とまれ方式とはいうものの仕事になっている側面に違和感を覚えた

●支援する側とユースが支援される側という関係を考える流れが強くなりすぎてしまったため提言のなかにだれでも参加者がなれることをあまり入れ込めなかった

●自信のない人もやっていこうよというものと、いけいけどんどのやり方が融合された提言になっていたかもしれない

第3分科会：市民社会とSDGs～地域住民・企業(人)・中学生の視点から持続可能な社会を考える～

○発表者の活動の特徴がバラバラだったため、どうなるかと思ったが、最後には3つがつながるような感覚を覚えた

△中学生からの報告で、フードバンクなど紹介されたが、1次利用者と2次利用者という階層が生まれていることが気になった

△2つのまちづくりのアプローチが紹介されたものの、目標が変化していくことを考えると、違うアプローチとはいえ、やっていることはあまり変わらないのではと感じた

#### 自由研究発表について

●参加者が少ない。テーマや内容をよりESDに近づけたものが必要ではないか

#### 総合討議「続・大研究SDGs!～私たちはどう行動するのか?」について

○高校生が頑張っていた

○ユースがまずつながるにはどうしたらいいのか?ということがテーマにあがっていたのはよかったのではないか

△自然発生的なプラットフォームがキーワードとなっていた

●分科会の提案が中心になりすぎていて、総合化をすすめる議論があまりできなかった

#### 全体について

・研究集会が年1回であり、ぶつ切り感がある。年間事業全体の一環としてやっていけたら。

・「こじんまりとした会」を他にひらいてもいいのではないか。

・参加者層が多様になってきて、実践と研究のはざまにいるように思う。研究/実践につながる場にできれば。

- ・インフォメーションがたくさんありすぎて、まとまりきれていない。
- ・分科会がネタ切れ状態になっているのでは。
- ・研究集会を続けていくためにどうマネジメントしていくかが課題である。運営費・人件費の捻出方法を真剣に考えるべきである。
- ・SDGs と ESD の関係について落とし込んでいるのかを全体で討議していく必要がある。
- ・SDGs からではないアプローチも探究すべきである。
- ・ESD に立ち返り、議論をしたい。
- ・ユース・学生スタッフも企画段階から関わるようにしてはどうか
- ・基調講演については、次の分科会の内容とのつながりをしっかりとつよように企画すべきであろう。
- ・分科会を分散会にして、統一テーマを掘り下げる形にしてはどうか。
- ・分科会間のシェアを丁寧にする時間がほしい。
- ・複数の分科会に参加できるようにしてはどうか。
- ・一般の方が増えているものの、交流する場が少なかったのではないか

以上のような意見が出された。

年に1回立ち止まって考える場として、ESD 実践研究集会を今後も続けていく必要性は認められるものの、進め方については改善すべき問題が多々ある。2020 年度は、十分な準備期間を取りながら、RCE 事務局、運営委員会を中心に、ESD 運動そのものと同じく、刷新を図る必要があるといえるであろう。

本集会は、ESD や SD をめぐる実践家がつどい、みずからの運動・活動をより大きな社会運動へとつなげるために、みずからを振り返り、他者とつながり、考えを深めながら実践を発展させることを目的とする。その目的にブレはないものの、学会のような研究活動と、運動組織の集会のような統一性との関係を、どのようなバランスで保つプログラムにすべきなのかという課題が残ったといえるであろう。

また、個人の意見と集団としての社会的な力の緊張関係も保つことも、われわれが意識しておかなければならない課題である。ESD や SDGs が国際舞台で大きな権力を背後に持ちながら進められている社会的運動であるだけに、個の自由に対する気遣いは不可欠である。その意味で、自由研究発表をさらに充実させるベクトルも忘れてはならない。

さらに、日本国内外の会議・セミナー・学会活動と連動しつつ、RCE 兵庫 - 神戸の個性を忘れないような「集会」をつくっていくことも課題である。メンバー全員が、よりグローバルなネットワーク活動を展開し、そこで出会う多様な人々を招待していくというようなことも求められるであろう。ESD を推進する力を高められるような集会づくりを、今後も目指していきたいものである。

文責：松岡 広路（神戸大学）

## ■リフレクション&オピニオン

若者の参加を促す「ESD 実践研究集会」に向けて

池田 拓也（灘中学校・高等学校）

第4回 ESD 実践研究集会は、校務の関係で、2日目のみ参加させて頂きました。

最初は、「分科会2：SDGsを進める出会いの方法－ユースと多世代の交流をどう生み出す？」の分科会担当者の一人として、打ち合わせから活発な議論を経て、当日を迎えることができました。多様な立場の方々からのご報告は、どれも大変興味深いもので、時間の少ない中で充実した発表をお聞かせ頂きました。この分科会では、若者の視点からの発言を促す意味で、「ユースコメンテーター」を高校生、大学生にお願いしていました。彼らの発言は「場の雰囲気」を柔らかくするもので、その後の議論を活発に進めるうえで、大きな役割を果たしたように思います。次に「自由研究発表」では、2018年度から実施している「KOBE 高校生豪雨災害ボランティアチーム」について、報告させて頂きました。灘高校と鳴尾高校の生徒からは「災害ボランティア活動」に参加した感想を述べてもらいました。会場からは高校生への質問も頂き、ありがたかったです。そして、総合討議では、時間の少ない中でしたが、周囲の方々と楽しく意見交換ができました。ここでも、高校生や中学生の参加があって、彼らの発言が会の雰囲気を大きく変えた気がします。

昨年度の開催でも、個人的に普段からお世話になっている方々や教え子などに集会への参加を呼び掛けていましたが、今年度は大人だけでなく、多くの高校生が参加してくれました。発表者としてだけでなく、参加者として来た高校生もいました。上で述べたように彼らのフレッシュな発言は、時には大人たちを「ドキッ」とさせるもので、充実した議論を行ううえでは、大変有意義なものだと思います。分科会2のテーマでもあった「ユースと多世代の交流」を進める一つの大きな「場」として、このESD 実践研究集会自体が、発展していけば素晴らしいと感じました。そのためにも、すでに神戸大学の学生さんを中心に努力されていますが、ユースの参加をもっと促すような「仕掛け」を考えていく必要はあります。これからも ESD 実践研究集会の充実に向けて、皆さんと議論していきたいと思っています。

## 多世代・多文化交流からユースがまなんだこと

福井 良子（特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構）

第4回 ESD 実践研究集会の2日目に行われた分科会2に発表者の一人として参加しました。発表は、2525 ファームから迫田瞬氏、井川翼氏、みなと銀行経営企画部 SDGs 推進室長藤井英二氏、iEARN から福井良子、野瀬彩弥の順で行われました。ねらいは、企業、教育団体、活動団体といった異なる組織で、多世代交流が生まれている活動の事例を紹介しあい、異なる組織の間での気づきを発見するような議論を深めることでした。また、多世代交流に参加したユース自身はこのような状況をどのように捉えているのかという関心から、「ユース・コメンテーター」として高校生・大学生・社会人の人たちが「なぜその活動に参加したのか」、「参加してどう変わったか」を発表しました。

私の所属する団体 iEARN(International Education and Resource Network)は世界 140 各国の教育関係者と彼らの生徒たちで行うプロジェクトをベースとした協働学習を進めています。SDGs の目標である「世界にある課題を、世界で解決する」に重きをおいて SDGs を進める学習活動を行っています。団体の目標は「平和な世界」につなげることです。その目標を根っこに置きながら (Think Globally)、多世代交流を身近なテーマ (KIMONO・おにぎり・伝承文化) で行っている事例 (Act Locally) を紹介しました。

2525 ファームは、南あわじ市において大学生や地元企業、農家などに関わりながら農業を行われており、みなと銀行経営企画部 SDGs 推進室では、CSR 活動の一環として主に特別支援学校などで地域密着型の取組をされていました。

それぞれの活動の原点は「出会い・交流」であり、そこから世代間、異文化間における「葛藤」があり、「学び」が生まれ、「活動を行う活力・原動力」につながっています。ユース・コメンテーターたちの分科会2での発言からも、活動団体の活力・原動力が、彼らを魅了したということがわかりました。

## 関西で唯一の RCE としてシンボリックな研究会を

西谷 寛（海と空の約束プロジェクト代表・ESD 推進ネットひょうご神戸副代表）

2019 年も、第 4 回 ESD 実践研究会に参加しました。ポスターセッションには第 1 回から 4 回連続で参加しています。参加者は年々少しずつですが参加者の属性、活動分野・地域、年齢層等の多様性は高まっていると思います。色々評価はあると思いますが、私には普段、聞けないセクターの状況や団体や個人の ESD や SDGs に関する考え方や取り巻く活動を知り得ることができ、新しい繋がりやネットワークが広がってとても有意義な機会だと感じています。基調講演も分科会もポスター発表も自由研究発表も年々深化、発展していると思います。

関西で唯一の RCE として、更に持続可能な開発のための教育に関する地域拠点のシンボリックな研究会の一つとして発展してほしいと願います。学校関係者や行政、企業、他大学や専門学校、高専や一般の方が、一層、興味を持って注目してくださりそして参画してほしいものです。そのためには更に、透明性を高めていくことや発信力が重要だと思います。年々、進化していると思いますが透明性は、ESD 実践研究会だけでなく、「ESD 推進ネットひょうご神戸」の団体や活動そのものについても発信性を高め認知して貰うことが重要だと思います。

私も ESD 実践研究会や ESD スタディツアープログラムの認知度を高めたいのでいろんなところで紹介していますが、「ESD 推進ネットひょうご神戸」を知った人に出会ったことがまだほとんどありません。大切なこともしているのに世間あまり知られていないということなのです。外部の方からそんな風に言われることさえあります。ESD スタディツアープログラムもプログラムの予定のアップだけでは意義、内容、先進性、評価が伝わりません。事務局のお手伝いや副代表をさせて頂いてからかなり心掛けて来ましたが力不足です。申し訳ありません。

アイデアに溢れパワフルな方、継続力をお持ちの方の登場を心から待っています。ESD スタディツアープログラムの受講学生も増え、プログラム提供団体にとっては、たくさんの学生の参加機会が増え次世代の人材育成に繋がり、団体の活性化やレベル向上にも役立っていると思います。

素晴らしい仕組み、制度だと思いますし、関西で唯一の国連大学に認められた「持続可能な開発のための教育に関する地域拠点」ですので今後ともどうぞよろしくお願いします。

## まちづくりからSDGsを考える

野崎 隆一（ESD 推進ネットひょうご神戸代表・神戸まちづくり研究所）

一昨年から2年続いて「SDGs 大研究」を実践研究集会のテーマにしてきました。その前後で考え方が変わったかということ、正直言って変わっていません。モヤっとしたところが、少しクッキリしたと言ったところでしょうか。

ESD を議論してきた我々、特に直接教育に関わらないものからすると、ゴールを提示することで、SD（持続可能な開発）への理解と取り組みの手がかりが得やすくなったと言える側面は認めざるを得ません。これまで関心の薄かった企業やNPOが、多く算入を表明したことで明らかです。

SDGsという言葉に出会って最初に思い描いたのは、阪神・淡路大震災の直後1997年の都市計画学会での議論でした。被災地で活動する都市計画家たちが計画者（planer）としての限界を知り、計画（plan）より過程（process）の重要性を主張しました。あるプランナーは、今後は「プランナー」ではなく「プロセスデザイナー」と名乗ると宣言しました。それは、その数年前に起こっていた「設計主義批判」の再燃でもありましたが、一時的なものに終わり、基本的な変化は起こりませんでした。Planerの顧客は行政です。行政は、豊富な情報を背景に、事業や予算も全て計画に基づいて動いています。そこにはプロセスで生じる揺らぎやブレの入る余地はありません。

ジェイン・ジェイコブスという都市計画家が「SYSTEM FOR SURVIVAL」という著作で「人間の社会には歴史的に二つの倫理が拮抗してきた。一つは商人（市民）文化、もう一つは統治（行政）文化である」と書いています。前者は、信用や契約、自由を重んじるが、後者は結束や忠誠、秩序を重んじる。商人文化から民主主義が生まれ、統治文化との戦いを経て現在に至っていますが、市民的規範（Citizenship）で動く世の中が実現するためには、統治の倫理を市場の倫理が乗り越えなければならない。言い換えれば、統治の倫理に潜むカオス恐怖症（市民不信）との戦いでもあると言えます。

Goal（目標）は、Plan（計画）とも読み替え可能です。ESDというプロセスにGoalという道筋を明示するというお節介（悪いことではない）です。その背景には、市民的プロセスへの不信とカオス恐怖を嗅ぎ取ってしまいます。本来、地球温暖化、人口減少、高齢化などグローバルな新しい課題に直面して、前例主義にとらわれず「持続可能な開発」を考えるのであれば、安易に目標を示して分析的（分断的）なロードマップに乗るのではなく、多様性の衝突で生じるカオスを恐れず、包摂的な議論が有意義であると思います。そのためには、現場の最前線にいる人間が頑張るしかないと再確認しました。

## 2. 国内 RCE 実務者会議・日本 RCE ユース会議

---

共催：RCE 兵庫-神戸・国連大学サステイナビリティ研究所  
2020 年 2 月 1 日～2 日



## 1.国内 RCE 実務者会議報告

国内 RCE の交流によってアクティベートされる持続可能な社会づくりを担う人々

清野 未恵子（神戸大学、RCE Hyogo-Kobe 事務局長）

RCE は、Regional Center of Experties on ESD の略で、地域の ESD の知の拠点である。ESD を推進する地域のなかでいくつかの条件を満たした地域が国連大学から認定を受け RCE として活動する。神戸大学を事務局とする RCE Hyogo-Kobe は 2007 年に認定された（俗称は ESD 推進ネットひょうご神戸）。RCE は 2020 年現在、日本国内には 8 箇所（2020 年 1 月には大牟田が認定を受けた）、国外には 174 箇所あり、RCE に所属する者の集いには、世界の RCE が一堂に会する Global conference、さらに、各 region（Europe、Americans、Africa、Asia-Pacific）ごとの会合がある。日本国内の RCE は Asia-Pacific region の会合で会うことがあるが、国内全ての RCE が集まることはあまりないため、国内全ての RCE が集まる会合「国内 RCE 実務者会議」が 2007 年から行われている。各 RCE が順番にこの会議をホストすることになっており、今年度は RCE Hyogo-Kobe にその順番が回ってきた。13 回目となるこの会議を単なる情報交換の場とするのではなく、それぞれの RCE の強み・弱みを認識しながら、これから先 10 年・100 年を見据えた展開を意識できるような場にしたいと考え、実務者会議を企画した。また、国内 RCE のユースメンバーの国内外の RCE とのネットワーキングも、課題となっていたため、実務者会議と並行してユースメンバーの会議も進行した。最終的には、非ユースのフォーラムで出た意見と、ユース会議で出た意見とをワークショップ・シェアリング懇親会で共有する形で、ユースと非ユースの一体感を演出した。以下、プログラムの詳細と、そこで得られた成果を簡単に紹介する。

### プログラム概要

日時：2020 年 2 月 1 日（土）13:30（13:00 チェックイン）～18:00、18:30～20:30

場所：・RCE 国内実務者代表者会議 および これからの RCE を考えるフォーラム

神戸大学人間発達環境学研究所 A 棟 2 階大会議室

（神戸大学鶴甲 2 キャンパス：神戸市灘区鶴甲 3-11）

・ワークショップシェアリング懇親会

神戸大学六甲台 1 キャンパス社会科学系アカデミア館 3 階

（レストランさくら：神戸市灘区六甲台町 2-1）

13:00～ チェックイン（名刺交換、資料確認、データ更新など）

13:30～ 「RCE 国内実務者代表者会議」開会

今年度の活動報告（各 RCE10 分）

北海道道央圏・仙台広域圏・横浜・中部・兵庫神戸・岡山・北九州

質疑応答

- 15:05～ 休憩（場面転換）
- 15:30～ 「これからの RCE を考えるフォーラム」主旨説明
- 15:35～ 話題提供  
RCE と国内外の ESD 動向（国連大学）  
国内外の RCE とのネットワーキングの意義と課題  
（小西美紀さん/RCE 岡山、古澤礼太さん/RCE 中部）
- 16:20～ グループディスカッション  
グローバルなネットワークとしての RCE の可能性と課題
- 18:00～ 移動
- 参加者：実務者代表者会議 21 名、フォーラム 33 名、ユース会議 25 名

## 成果

RCE のメリットは国内外の RCE と比較的容易につながるができることであるし、それが ESD 活動支援センターが展開する地域 ESD 拠点との差異でもある。だが、国内外の会合に参加してそうした強みを認識できるのは、事務局などの限られたメンバーであり、RCE に所属するメンバーの多くが「グローバルに活動すること」を意識していないことが課題である。今回、RCE Hyogo-Kobe のメンバー 12 名がフォーラムから参加したが、そのメンバーにとっては、RCE の意義や役割について考える契機になったように感じた。また、RCE のメンバーのなかで「RCE としての意識」にグラデーションがあることは、どの RCE にも当てはまることのようにあり、今後、ホストとなる RCE 内の意識を高める場として実務者会議を使っていくことで、国内の RCE の活動がアクティベートされることを期待する。最終的なゴールを「持続可能な開発を可能にする社会づくり」としたとき、RCE はそれを目指す一つの方法として捉え、目的に応じて様々な手法を用いるという柔軟な考え方を持ち合わせることも、RCE を継続させることに囚われて大切な目標を見失わないようにするために必要なスタンスであることに気付かされた。

## ワークショップで出された意見

### テーマ 1「グローバルに RCE 同士が繋がっていくために必要なことは？」

#### ■なぜグローバルか

- ・グローバルは海外のことか？⇒まずはローカルが出発点
- ・ローカル＝地域間の顔の見える交流で、それにより「地域」の独自性を知ることができる。それをグローバルなものにしていくには、コーディネーターが必要。
- ・個々はグローバルに動いている（多言語紙芝居、海外勤務経験など）

#### ■つながる仕組み

- ・そもそも国内の RCE はつながっているのか？

⇒RCE は唯一無二ではない：多様なアプローチの一つ

- ・大学生などを活動の担い手に
- ・大阪は万博に向け SDGs ビックイベントを企画中。こうした流れにのっかる？などして、共

通の目標をつくって連携・団結してはどうか

- ・「資金」と「言語」が必要
- －企業と連携したり（SDGs は興味をひきやすいが、ESD はいまいち）、留学生をコーディネーターとして巻き込む
- －行政の関与が必要では
- ・国外の RCE との距離が近い（RCE 北九州と RCE Tong-yeong など）と連携しやすい
- ・同じ課題（SDGs +  $\alpha$ ）を一緒に解決⇒関係団体・NPO に情報を投げてはどうか
- ・海外と交流している団体を活用する
- ・繋がりたいという先方のニーズ&こちらも繋がりたい 双方向のマッチング
- －共有→共感→協働作業の順に国際連携を進めていく

#### ■つながる意義

- ・RCE（事務局を務める大学や行政）の継続性の担保、計画づくり、多様な活動が課題⇔モチベーションの担保
- ・色々な役割を持っている人々がいる。必要とされる存在だと感じる活動は大切に、「居場所」が必要
- ⇔普段、連携を意識していない（勉強会などのときは意識する）

#### ■つながりを支える仕組み

- ・RCE 内で、メンバーの入れ替わり（世代交代）による意識の低下を防ぐ  
⇔RCE の役割を私たちはわかっているか？RCE 内でも誰がメンバーかわからない
- ・”ESD は学び合いと人づくり”という理念のもと、市民（団体）同士がお互いを理解する

#### ■その他

- ・E（教育）はマストだが、何か大きな出来事が起きるたびに、〇〇教育が勃興するように、教育が変わりすぎていないか
- ・ESD、SDGs、RCE はそれぞれ別もの感がある。

### テーマ2「このグローバルな RCE が、100 年続くには、一体何が必要か」

#### ■人材

- ・Active な Player（だけではだめけど）
- ・エネルギー：楽しさ、地域愛
- ・「食べていける」人材を育てる
- ・次の次の世代

#### ■手法・ツール

- ・印籠：鑑札、通行手形
- ・ESD ありきではなく、目の前の SD を教育と実践で進めていく
- ・情報の収集と発信
- ・RCE 間で刺激し合う
- ・世界の 174 の RCE、姉妹都市のようなもの。RCE パスポートを使いきれていない

- ・グローバルになることのメリットを認識する
- ・専従の事務局がいる
- ・PR よりも、人材交流（人同士のつながり）が重要

■環境

- ・文化・祭り：空気になる

■そもそも

- ・SD が当たり前になれば 100 年後は RCE は不要？
- ・RCE は目的ではなく手段である
- ・世界はどんどん変わる。その時の「生きる力」が必要。その力をつけてあげられるように学校と地域が有機的につながって、100 年後にはなくっていい。

## 2.日本 RCE ユース会議概要

堤 拓也（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

2020年2月1日（土）、2日（日）、国連大学サステナビリティ研究所（以下、UNU-IAS）とRCE兵庫-神戸の共催により日本RCEユース会議（以下、ユース会議）が行われた。ユース会議はESD推進において重要項目の1つとされているユース支援を目的として2018年度にUNU-IASの主催で始められた事業である。2019年度のユース会議は〈ユース主体〉ということにより意識し、ホストであるRCE兵庫-神戸のユースとして、堤、後藤、福田、渡辺の4名が中心となり、他のRCEユースとオンライン会議等で協議を進めながら企画・調整・進行を行った。2019年度のユース会議は、ユース会議参加者が、（1）ESDの推進方法について考えを深める、（2）RCE日本ユースとしての目標と計画づくりを行う、（3）この会議の参加者一人ひとりが自身とESD、RCEの関係について前向きな考えを持つ、ということを目指して進められた。ユース会議当日には、グループ・ファシリテーターとして、泉、小倉も加わり、ESDプラットフォームWILL（RCE兵庫-神戸のユースが主体となって運営するESD推進のためのプラットフォームづくり事業）からは合計6名のユースメンバーが参加することとなった。

### <1日目>

ユース会議1日目は神戸大学大学院人間発達環境学研究科D-roomで行われた。当日は、RCE北海道道央圏から2名、RCE仙台広域圏から4名、RCE横浜から2名、RCE中部から2名、RCE兵庫-神戸から6名、RCE岡山から4名、RCE北九州から3名、環境省から1名、UNU-IASから1名のユースが参加し、合計で25名となった。

まず、RCE兵庫-神戸の堤より、ユース会議の趣旨確認とRCEについての簡単な説明を行った後、アイスブレイク・自己紹介として各々が持ち寄った「私のベストショット!」を紹介するワークを行った。進行はRCE兵庫-神戸の福田が務め、テンポよく写真が紹介されていった。それぞれが所属する団体の活動写真が多かったが、その切り取り方は様々であり、美しい風景画もあれば、奇抜な写真もあり、それぞれの個性が発揮された自己紹介であった。



次に、堤がファシリテーターとなり、6名ずつの4グループに分かれて「ESD企画づくりワークショップ」を行った。まずは、「活動上で課題に感じていること」、「こんな活動がしてみたい!」というテーマで、グループ内で改めて自己紹介・活動紹介を行なった後、企画書としてどんな項目が必要かということ



ことを全体で話し合い、グループごとの作業にうつった。企画は同じグループになった6名で実施するものと想定して作成した。企画書づくりの時間は90分であったが、それぞれ所属や活動分野が異なるメンバーが集まっているため、企画書づく

りを素材としながら ESD とは何か、ESD を推進するとはどういうことか、というところから議論が進められていった。各グループ3分間の発表の後、グループワークに戻り、「ESD 企画づくりワークショップ」の振り返りとして「ESD を推進するポイント!」、「ESD をめぐる疑問や課題」をグループごとに整理し、全体でディスカッションを行った。それぞれのグループが意識していたわけではないが、全く趣が異なる4つの ESD 企画書が作成され、ユース会議参加者の多様性を感じるとともに、ESD を推進するアプローチの多様性についても考えさせられたワークショップであった。また、企画書については、RCE 実務者会議とのシェアリング懇親会でも発表した。

## <2日目>

ユース会議2日目は、フィールドワークとして、RCE 兵庫-神戸の野崎さん、西谷寛さん、高田さん、石倉さんにご協力いただき、新長田のまち、朝霧川、小川フィールド、くららベーカリーにて、地域における多様な活動現場に触れさせていただいた。2日目の参加者は、RCE 実務者会議の参加者が加わり、また、フィールドワークを受け入れてくださった4名の方々も含めると合計40名であった。



お昼には、それぞれのフィールドワークに参加したメンバーがふたば学舎にて合流し、昼食を食べながらお土産話の交換を行った。途中、参加者の1人が忘れたパンをくららベーカリーの石倉さんがふたば学舎まで届けにきてくださる場面があり、石倉さんにもご挨拶をいただくことができた。

午後からは、「私たちのこれから」というテーマでワールドカフェ方式のワークショップを行った。はじめのグループは、RCE 実務者会議参加者とユース会議参加者が分離するかたちで分かれ、途中の2回のセッションでは、RCE 実務者会議参加者とユース会議参加者が混ざり合っ



て議論を行った。最後に、はじめのグループに戻ってそれぞれのお土産話の共有等を行った後、ユース会議参加者を中心に全体ディスカッションを行った。全体ディスカッションでは、(1) RCE ユースとして Facebook を立ち上げる、例えば、持ち回り制にして各 RCE ユースの活動を情報交換する、(2) それぞれの地域でどんな人がどんな活動をしているのかをマッピングして持ち寄る、(3) RCE ユースの事務局をどのようにしていくか検討する、(4) ワクワクできるユースのミッションやビジョンをつくっていく必要があるといった意見が出された。

2019 年度日本 RCE ユース会議の開催においては、UNU-IAS ならびに RCE 兵庫-神戸のみなさまには、物心両面からの支援を賜り、大変お世話になりました。末筆ではございますが、心より感謝申し上げます。

## アンケート結果

今後の企画づくりに向けて、ユース会議参加者に対して Google フォームを用いたアンケートを行った。以下では、アクティビティごとの参加者の声を一部抜粋して紹介する。なお、回答者は 20 名であり、その内訳は、RCE 北海道道央圏 1 名、RCE 仙台広域圏 3 名、RCE 横浜 2 名、RCE 中部 2 名、RCE 兵庫-神戸 6 名、RCE 岡山 2 名、RCE 北九州 2 名、環境省 1 名、UNU-IAS1 名であった。

### 1. 「私のベストショット！」について（回答者 20 名）

満足	やや満足	普通	やや不満	不満
15	4	1	0	0

(1) おもしろかった点、良かった点（一部抜粋）

- ・活動や肩書きだけでなく、お互いのパーソナルを知りながら自己紹介ができたのでとても良かった
- ・自身が夢中になっていることについて話す姿が素敵だった

(2) 今後こうすれば良いと思うこと（一部抜粋）

- ・30分以上立ちっぱなしだったのはややしんどかった
- ・予め作ってくださった Facebook のページが活用されなかった

### 2. 「ESD 企画づくりワークショップ」について（回答者 20 名）

満足	やや満足	普通	やや不満	不満
12	7	0	1	0

(1) おもしろかった点、良かった点（一部抜粋）

- ・それぞれが行っている活動のことや、「ESD を推進すること」がどんなことを意味するのか、深く話すことができました
- ・「企画」として十分に練られたものが出せたわけではなかったが、メンバーそれぞれが考える「ESD」が垣間見えてワクワクしました
- ・普段の活動では、議論や事業遂行の中で手段が目的化することが多かったため、そういった悩みも含めてメンバーと共有し、最後まで目的のために何をするか？を議論できて、とても有難い機会でした。今後の自分の活動に活かしたいと思います。

(2) 今後こうすれば良いと思うこと（一部抜粋）

- ・実現度とのバランスの取り方が難しいと感じた。実際に実行まで持つのであれば、近い課題意識に合わせたグループ分けなどが必要かもしれないし、他エリアの人と組んで実現することの事例などがあるとわかりやすいかと思った。
- ・なぜ「RCE ユース」として企画書を考えているのか、動機もゴールもない状態だったのが残念。これは会議全体の課題だと思います。
- ・課題があってこそその解決策だと思うので、なぜその ESD が必要なのか深掘りできればよかつ

た。または、最初からテーマにする課題を与えられたらやりやすかった。

・似た分野の人とできたらより深い話ができただのかなと思います。ですが、様々な視点の意見が聞けたり、話し合えたのは楽しかったです。

### 3. 「フィールドワーク」について（回答者 19 名）

満足	やや満足	普通	やや不満	不満
16	2	2	0	0

(1) おもしろかった点、良かった点（一部抜粋）

・一見、復興が達成されたように見える長田の街でも多くの葛藤があったことがわかった。持続可能な街を作るためには、そこに住む人たちの声が必要不可欠であることがわかった。

・西谷さん自身が朝霧川周辺地域の方々の憩いの場となり、皆さんが集う理由は西谷さんのお人柄、朝霧川への愛情、西谷さんの発信力など、人が創る地域交流、という印象を受けました。とてもよいお話を聞くことができました。

・合意形成の現場の話を聞いたのは初めてで、とても貴重でした。

・ESD の実践現場として、多様な人と共に生きること、障がいのある方々も生き生きと働けるような社会をつくること、地域に密着して長く事業を続けていくことを、くららベーカリーさんを訪れることで、体験できると、実感しました。

(2) 今後こうすれば良いと思うこと（一部抜粋）

・もっと他のフィールドワークの人達の話を知りたい。

・人数が多すぎてしまった感じがしました

・配られたポストイットを活用した記憶がないので、共有する時間をもう少し当てて欲しかった。

### 4. 「私たちのこれからを考えるワークショップ」について（回答者 20 名）

満足	やや満足	普通	やや不満	不満
6	12	2	0	0

(1) おもしろかった点、良かった点（一部抜粋）

・こういうワークをしっかりと交わしていくことが大事だなと思った。いろいろな人がいろんな視点で意見を出して、そうかと納得し合ったり疑問を深めたりできる時間だったと思う。

・それぞれが抱える課題は似ているのだなと気づいた。もっとユースが活躍していったほうが前に進みそうだと感じた。最初はユース同士で話せる時間があったので、大人の人と話すときにも心強かった。

・「自分目線で楽しい、面白いと思えること」から始めよう、といった前向きな意見がたくさん出てきた点がよかったです。

(2) 今後こうすれば良いと思うこと（一部抜粋）

・時間がなかったから仕方がないが、大人側の考えていることを知りたい。

・ディスカッションの結論があいまいで終わってしまったので、時間が許せば次回の RCE ユー

ス会議までの目標などを明確にできたらよかったと思います。

・RCE ユースとしての今後について、「ユースだけで」話せる時間がもう少しとれたら良かったかもしれません。（もう少しクリエイティブな意見が出たかも）

・2日間続けての開催だったので、少し疲れ気味の方もいたかな、と思います。また、ワールドカフェ方式にしたので、どこのテーブルでも似た意見が出ていました。抽象的に「私たちのこれから」を描いたあと、具体的な来年どうするか、今後ユースでどんな活動をするか、という流れがあれば、今後の動きについてもっと考えやすかったかなと思います。

## ■ユースチームのリフレクション&オピニオン

ユース会議の理想と現実～ESD の学びの場を自分たちでデザインするには～

堤 拓也（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

2019年度ユース会議の目的は、(1) ESD の推進方法について考えを深める、(2) RCE 日本ユースとしての目標と計画づくりを行う、(3) この会議の参加者一人ひとりが自身と ESD、RCE の関係について前向きな考えを持つ、というものであった。このユース会議の目的は広く捉えれば〈ユースが ESD を推進していくための力をつけていくこと〉である。それでは、ユース会議に参加したユースはどのようにして ESD を推進していくための力をつけていくことができるのだろうか、例えば、以下のような学びのプロセスが想定ができる。①ユースが相互に刺激を与え合うことで、それぞれに活動を展開させていく、②ユースがネットワーク化することで、集団としての力を高めていく、③ユースが RCE のリソースを活用することで、ESD を推進するための力をつけていく。

今回のユース会議でいえば、主に、①、②を目的として掲げていた。③については、わざわざ国内の RCE ユースで集まらずとも、それぞれの RCE ごとにできるため、あまり意識されていなかったとも言えるが、そもそもユース側に RCE のリソースを活用するだけの体制が整っていなかったという理由があったように思われる。つまり、現在の RCE 日本ユースは、ユースが主体的に RCE のリソースを活用するというよりは、RCE あるいは UNU-IAS がそれぞれのリソースを用いた支援（RCE ネットワークの利用、旅費の支給等）を行うことによって、①や②を目的としたユース会議が実施できているという状況にあるのではないだろうか。

また、そもそも、RCE 日本ユースとは何者なのか。現状では、それぞれの国内 RCE においてユース会議に出てはどうかと推薦されたメンバーの集まりである。したがって、メンバーの中には、RCE の活動を全く知らない人もいれば、RCE と自分は全く関係がないと思っている人もいる。したがって、ユース会議は、継続的な参加者を除けば、毎年「よくわからないが参加させられている」というところからはじまる。2019年度は事前オンライン会議を何度か実施することで、ユース会議の目的についてある程度共通の理解を持ってスタートすることができた。そして、ユース会議の最後には、それぞれのユースが主体的に ESD を推進していくための力をつけていこうとする雰囲気も感じられたように思う。

しかし、先ほども述べたように、ユース会議の現状は、RCE あるいは UNU-IAS の支援があって実施できているという状況にある。さらに、「よくわからないが参加させられている」メンバーからすれば、RCE あるいは UNU-IAS が機会をつくってくれたから参加してみたという状態からのスタートである。このような構造では、ユースが主体性を発揮することは難しく、例えば、ユースのネットワーク化ひとつを例にとってみても、RCE や UNU-IAS の支援ありきで考えていては、ユースは常に外部からの力によって〈ネットワーク化させられる〉構図になってしまっているのではないだろうか。

事前オンライン会議や「私たちのこれからを考えるワークショップ」において日本 RCE ユー

スとしての目標やビジョンをつくろうという意見が盛んに述べられた。これは、なぜ、わざわざユース会議として一堂に会する必要があるのか、日本 RCE ユースとしてのネットワーク化を図る必要があるのかを、自分たちで明確にしたいという気持ちの表れのようにも思われる。まずは、その第一歩として、それぞれの RCE ユースがそれぞれに学びの場を整備するところからはじめ、ユース会議に誰が出るのかをユース自身で推薦できるような仕組みに変えていってはどうか。

以上の提案に限らず、今回のユース会議で生まれた小さな火が絶えることのないよう、今後もメンバーと連絡を取り合いながら、ひとまずは来年度のユース会議へむけて、協議を進めていきたい。

## ESD 企画づくりワークショップにみる RCE ユースの課題と展望

後藤 聡美 (神戸大学大学院人間発達環境学研究所)

2 日間にわたって実施されたユース会議は、「ESD 企画づくりワークショップ」が、そのスタートを切るプログラムとして行われた。国内 7 つの RCE から集った 25 名の参加者が 4 つのグループに分かれ、ESD 推進に向けた企画について話し合った。企画の実現可能性を問わず、ざっくばらんに参加者が交流することのできたこの時間では、「ESD を推進するとはどういうことか?」「RCE でできることは何か?」「SDGs をどう捉えるか?」などということを考えながら、それぞれが日々感じている違和感や理想の社会像を語り合うことができたのではないだろうか。

ワークショップでは、具体的に、自分たちのライフスタイルを見直しながら環境問題にアプローチするスローガンや、身近なフィールドで体を動かしながら社会問題に触れるイベント、SNS を用いて多様な世代の願いを形にしていこうとする取り組みなど、参加者の個性が活かされた企画が生まれていた。異なる視点からの ESD へのアプローチは非常に興味深く、有意義な時間であった。

ただ、参加者と時間を共有することを通して気になったことがある。それは、この会議に参加したユースメンバーと、各 RCE で旗を振っている人々との間で十分に「ESD についての対話」がなされているのであろうか、ということである。ESD という捉えどころのない概念は、個々人で認識が微妙に異なる。多様な価値を尊重するはずの ESD においては、その異同はあって然るべきともいえよう。特定の評価軸の重視や狭義の SDGs 一辺倒では、本質的な議論を蔑ろにしてしまいかねない。ところが、「ユース」と区分されているメンバーはその弁別化ゆえ、大きな流れを作ろうとしている人たちの考える ESD あるいは SDGs に対して批判的なまなざしを向け、自らの価値観を揺らがせることのできる隙が狭まっているようにも感じられた。予定調和的な会話でもなく、パターンリスティックな介入でもない対話の中で新しい価値を生み出していく必要があるように思われる。

今回のユース会議は結果として、そうした、RCE 全体が抱えるやや閉塞感があるともいえる状況に風穴を開けることにつながったのではないだろうか。環境の異なる地域での活動や考え方と触れることは、単眼的に凝り固まった思考をほぐすきっかけになりうる。その異同の中で生じた摩擦をいかに自分たちの活動に還元し、社会変革の活力へと変容させることができるかが課題であろう。

また、ワークショップの中では、ESD や SDGs についての認識や考え方の違いを垣間見ながらも、グループのメンバーが共通して「小さな思いを大切にしたい」と考えていたことが非常に印象的であった。そして、このように近似した問題意識をもつユースが他地域で活動しているということは、自分たちが活動する際に背中を押してくれるのだということを実感した。

「地球の持続可能性」というと規模の大きいダイナミックな動きがクローズアップされやすいが、クローズアップされにくい活動の中に幾重にも積み重なっている「小さな思い」こそが、問題の本質を問うていく重要な役割を果たしているのではないだろうか。RCE とは、そうした「小さな思い」を持ちながら、社会が変わっていくことを信じて地道に活動を続けている人たち

の集まりだと捉えることもできる。「小さな思い」が分散的に個々別々の目標達成を目指すのではなく、ESD という大きなベクトルの中で異なる価値観が影響し合い、葛藤を乗り越えていかなければならないと感じた。

今回、他地域のユースメンバーと肩肘張らない議論をすることで、RCE 自体のあり方について考えることができたように思う。「小さな思い」を大切にしながら進めていくためには、大きな力に絡めとられない姿勢で活動を展開していかなければならないのであろう。ESD 推進において重要な視点を確認させてくれたユースメンバーにこの場を借りて謝意を表したい。今後も様々な機会を通して、時間をかけながら「ともに闘う」ことのできる仲間を増やしていければと思う。

## 私たちの手で社会をつくる

福田 百（神戸大学大学院人間発達環境学研究所）

本報告では、印象に残っているフィールドワークでの出来事を踏まえ、RCE ユース会議を通じて考えたことを紹介したい。

まず、私が参加したフィールドワークは震災復興系であり、野崎隆一さん(特定非営利活動法人まちづくり研究所理事長、RCE 兵庫-神戸代表)に案内していただいた。参加者数は17名である。阪神淡路大震災で大きな被害を受けた長田の街を歩き、区画整理事業と再開発事業が行われた地域を訪れた。また、商店街で店を営むみなさんと道中で出会い、お話を伺うことができた。その中で、味萬の店主である伊藤さんの言葉が頭に残っている。「自分の手におさまる復興をしていく必要がある」。大規模な再開発のなか、復興過程で商店街会長として活動され、阪神淡路大震災から25年経った長田を見ている人だからこその言葉のように感じた。実際、再開発の過程で建てられたものを違う形で活用しようと思っても、造られた当初の想定が狭く、難しい状況が残されているというお話であった。10年20年先を見据え、どんな将来を描くのかをじっくり考え進めていくことが大切であるとのことであった。これは、復興という文脈でのお話ではあったものの、ESD 推進につながる考え方であることが共有された。現代社会において、自分ではなにもコントロールできないという感覚は誰もが持ちうるものであろう。しかし、丁寧に自分たちの手で社会をつくっていくことの重要性を改めて思い起こすことになった。持続不可能な問題に対峙するなかで、おかしいと思えば、話し合い、実際に変えていける手立てを取り戻すことが求められている。

しかし、この「自分の手におさまる範囲で物事を進めていくことが必要だ」という言葉を胸にRCE ユース会議やRCEの活動を振り返ったとき、その考え方とRCEのグローバルな動きはどうつながるのだろうかと思ひかかった。RCE ユース会議のワークショップのなかでも、RCEのグローバルネットワークとの関わりをどのようにもつことができるかといったことが内容として挙がっていたが、英語でのコミュニケーションのハードルや時間的・経済的制約などによって、これまでRCEのグローバルネットワークを活用できていないことが言及されていた。その場で感じたのは、グローバルネットワークを考えたとき、なんだか自分の手から離れていくような感覚である。しかし、グローバル化し分断が進む社会のなかで、地球規模の問題から地域ごとに生じている問題と、様々な問題に直面している私たちは、地域だけでも世界だけでもなく、関わり変えていく主体となることが必要だと考えられる。どのようにして地域で世界で関わり変えていく主体となれるのだろうか。

私はこれまで、「あなたのままでいい」という言葉に違和感を持ってきた。「インクルーシブ」があらゆる場面で言われるようになってきた現在において、たびたび聞く言葉のように思う。自分自身も、少しモヤモヤしながら言ったこともある。「あなたのままでいい」と声を掛けてくれる人の優しさに救われることもあった。しかし、この言葉は、「変わらないこと」を前提にしているように思う。もちろん、優秀で力強い人間になれ、というのではない。私たちは、他者と関わり合いながら、そのままの自分が認められながら、ただ流されるのではなく、意識・行動・態度

を変化させていくべきではないだろうか。そして、私が社会と関わり、私たちの手で社会を変えていく方法を見出していきたい。

## 多様性を受け容れ、共に生きる社会のあり方を考えた時間

～くららベーかリーでのパン焼き体験から～

渡邊 久美子（神戸大学法学部）

日本RCEユース会議の2日目に行われたフィールドワークで、私は、福祉系のフィールドワークに参加した。福祉系のフィールドワークは、長田で障がい者の就労継続支援を行っている、くららベーかリーを訪問した。

くららベーかリーは現在10名ほどの障がい者が働いており、様々な種類のパンを作って販売している。また、地域に住む子どもを対象にパン焼き体験を行っており、時には企業の新入社員研修としてこの体験を取り入れることもあるそうだ。今回私たちも実際にパン焼き体験をさせていただき、利用者の方々とふれあいながらパンづくりを行なった。くららベーかリーでは、利用者の方々のことを「メンバー」と呼んでおり、毎日和気藹々と楽しんで働いているそうだ。くららベーかリーでの仕事についてや、普段の生活で好きなことなど、メンバーの方々と様々な話をしながら、パンを作ったり焼き立てのパンを食べたりした。笑顔がとても素敵な方ばかりで、お互いのことを大事にしていることが感じられる、あったかい空間だった。

体験後、石倉悦子さんから、くららベーかリーの創業時のことや、普段の仕事の様子などについて、じっくりとお話を伺う時間があった。石倉さんのお話の中で印象に残ったのが、くららベーかリーと地域住民の方々とのつながりである。くららベーかリーは、震災後の区画整理によって現在の場所に移転してきた。当時、くららベーかリーのことを知らない周辺住民の中には、利用者の方を敬遠する人もいたが、地域のイベントへの出店や、学校などでの子どもたちとの交流を通して、くららベーかリーの活動の内容や、その明るい雰囲気次第に伝わり、徐々に「地域に親しまれるパン屋さん」へとになっていった。それは、くららベーかリーで働くメンバーが、自らの個性を発揮し、生き生きと働いていたからこそ、地域住民の方々が、障がい者に対する偏見をなくし、障がい者と共に生きる社会を当たり前だと思えるようになったのではないだろうか。石倉さんは、障がいのある人を、親や身近な人だけで面倒を見るのではなく、「社会の子」として、社会全体で受け容れていこうとする姿勢が大切だということを仰っていた。くららベーかリーが、多様な人々を地域全体、社会全体で支え、共生していくモデルとして、学べることが多いのではないかと感じた。

人々の多様性を受け容れ、インクルーシブな社会をつくっていくことは、ESDを推進する上で重要だと言われている。あらゆる人が自分の個性を発揮でき、それを受け容れられる社会をつくることは、異質なものに対する差別や偏見をなくし、すべての人が共生できる社会につながるだろう。くららベーかリーでの体験を通して、まずは、みんなが笑顔で楽しくいられる場を自分のまわりでつくっていくことが、共生社会をつくる第一歩になるかもしれないと考えた。

## RCE ユースのつながりを強めていくために

泉 史織（神戸大学国際人間科学部）

今回の RCE ユース会議において、私は RCE 兵庫-神戸の全体像や特徴が少し理解でき、また全国の RCE ユース達と対面で交流出来たことにおいて、とても価値を得られたと思っている。2 回目の開催となる RCE ユース会議で、今回のホストは RCE 兵庫-神戸であったが、私は企画段階での参加はせず、当日のみの参加だった。

今回の会議では実務者とユースを分けたり、混ぜたり、多様な編成でのグループワーク、交流を行なった。その中で、ユース自体の定義やユースという概念自体の存在意義についても考えながら活動する瞬間が多くあった。各々が所属するボランティア団体で感じている、特にメンバーそれぞれの立場や性質についての疑問や課題について、話したり気づきを得られたりする場面があった。

2 日目の、会議全体のまとめとなるワークショップでは、ワールドカフェ形式で「RCE ユースのこれから」を考えた。話を進める中で、ボランティアに人が向かう要因となるものの中で一番大きいものは、魅力のある人との交流ではないか、という話が何度もでた。そこから、RCE メンバー個人の魅力に触れる機会を作ることが、RCE のようなボランティアな組織が固いつながりを作るために必要なのではないか、という意見が出てきた。私がファシリテーターをしていたテーブルでは、各地に訪れる度にその RCE のメンバーの顔が浮かぶようなコミュニティづくりが出来たら理想的だ、という話になった。今回の RCE ユース会議を振り返ると、対面でする同じ経験（今回では集団でのフィールドワーク）を通じて、参加者の目の付け所の違いやそれぞれが今まで行ってきた活動で課題に思っていたことを少しずつ知ることが出来た。あの場で生まれた何気ない会話からその人について知れたことは、会議や他の対話手段で得る彼らの情報とはまた異質で、それよりも印象深く自分の胸に残っているように思う。よって、RCE ユース会議のような場面で直接会うことは規模の大きな団体の結束を強め、活用していくのに役立つそうだった。また、このディスカッションでは、前日よりもずいぶん話しやすくなっていたように感じた。これも、共通の経験を、活動を通して持ち、気づきを得た場面や背景を想像しやすくなった為に共感しやすくなったからなのではないかと思った。共通の経験に関連する話題に偏ってしまう、という点では意見の多様性に欠ける可能性があるという問題はあるかもしれないが、普段取り組んでいる活動の分野も住む場所も異なる参加者たちが議論を進める上では良い効果があったように思う。少なくとも私は、初めて会った人との議論の中でどんどん発言していくことに対して苦手意識があるので、このような話しやすくなる仕掛けについてもっと探っていき、ESD プラットフォーム WILL の活動のなかでも多様な人と深い話が出来るようにできたら良いと思った。

主に 2 日目のワークショップを通して、私は今回の RCE ユース会議の様な形式の交流の場が今後も続けられれば回を追う毎に RCE のつながりは深めていけそうだと私は感じた。来年の RCE ユース会議開催に向けて、今持てたつながりをどう保っていくか、ということや、つながりを広げるためにどう動けば良かったのか、ということについて、もっと検討していきたいと思う。

## ファシリテーターを経験して見えたユースの可能性

小倉 未来（神戸大学国際人間科学部）

今回初めて RCE ユース会議に参加し、2 日目のワールドカフェでは、ファシリテーターを務めさせていただいた。グループのディスカッションでは、主に、RCE 内でのユースの位置づけ、そして今後のユースの可能性についての話題で話が進んでいった。ディスカッションを振り返って、「ユース」に対して感じたことは以下の通りである。

まず、若者と大人の間で年齢や立場の違いはあっても、ゴールに向かって動き出せる権利や勢力は対等なものであるということだ。これは、私自身が大人と交流する機会を通して、若者は、社会や大人に対して意見を言える立場、言わなければいけない立場にあることを再認識したからである。それと同時に、私はそこにユースの可能性を見出すことができると考える。しかし、こうした可能性を持つ若者が多くいる中で、若者の思いがなおざりになってはいないだろうか。これまで以上に、社会システムの中にユースが入っていき、ある程度の自由が許された環境の中でユースとして責任のある発言、活動をする。さらに、その思考や行動が社会に影響を与え波紋していくような仕組みづくりを考えることが前提として必要であるように思われる。

そして、RCE は地域ごとによってゴール達成へのアプローチの仕方が様々である。もちろん、取り組むべき課題や焦点を当てるターゲットは地域によって変わるし変えていく必要があると考える。ただ、一つの共通認識として持っていたいのは、動き方や進め方の過程は多様であるが、その先にある ESD を考え実践するために動くという軸はぶれないということである。それゆえに、各地のユースが強みを生かした多様な活動を共有し合えば、ユースは互いに刺激し高め合う関係性を構築することができると思う。そのためのユースのための意見共有のコミュニティは必要であり、その空間はユースとしての自覚を維持させたり、価値や期待を意識したりするのにも役立つと考える。やっていることはバラバラであっても、未来で目指す叶えたい世界観を共有してさえいれば、今やっていることやこれからやろうとしていることに、惜しみなく挑戦できるのだと思う。

今回の参加は、私自身が ESD を考え直すきっかけになったのはもちろん、自分の何倍も積極的に考え、意欲的に行動する全国各地のユースと出会えたことがとても大きな刺激となった。RCE ユースのひとりとして、今後も自信を持って ESD、SDGs について考え動くことを続けていきたい。

### 3. 自由投稿：ESD と SDGs の関係を語る

---



## <SDGsのためのESD>という潮流におけるエージェンシーの可能性

清野 未恵子 (神戸大学)

はじめに

SDGsの達成に向けた動きのなかで、「持続可能な開発のための教育：SDGs達成に向けて (ESD for 2030)」が2019年12月に国連総会において採択された。そこでは、「ESDはSDGs実現の鍵である」と名言してある。世界レベルでそのような宣言がなされているなかで、あえて、ESDとSDGsの関係を語る、という特集の意味を、どのように捉えたらよいのであろうか。本稿では、SDGsとESDを定位しようとする世界的潮流のなかで、SDGsを超えた先にある (beyond SDGs) ESDとなるためのキー概念となる「エージェンシー」概念の可能性について述べてみたい。

### I. ESD for 2030 と Education 2030 と OECD Education 2030

ESDを推進する国際的な動きを整理すると、まず、2005年～2014年のDESD (ESDのための10年)、次に2015年～2019年のGAP (Global Action Programme)、2020年～2030年のESD for 2030という流れで推移している。「2030」がついたキャッチフレーズをどこかで見たな、と思っていたら、OECD (経済協力開発機構) では、2015年から、Education 2030 プロジェクトというものが進められている。これは教育が変わっていくための国際的な取り組みである (OECD, 2018)。一方、ユネスコが発行するデジタルペーパーには、SDG4-Education 2030: Education for Sustainable development beyond 2019というタイトルがつけられており、要旨には、「GAPの後継としてESD for 2030を提唱する」と書かれている。Education 2030 プロジェクト (以下、OECD Education 2030) と、ユネスコが提唱するESD for 2030、どちらにも2030がついているために読む方としては混乱してしまうのであるが、実は似て非なるものである。その中身を簡単に紹介してみたい。

#### 1. ESD for 2030

SDGsが2015年に国連会議で採択されてから、ユネスコはSDGsのなかで特に関連しそうな分野について、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にからめた活動方針を表明している (2016, ED-2016/WS/28)。そこでは「教育を通じて生活が変容 (Transform) すること、SDGsを達成するためのメインのドライバーとなるのが教育であることを認識すること」が、目的であると書かれている。その後、2019年 (206 EX/6.II) には、「ESDはSDG4に不可欠な要素であり、17のSDGsの鍵となる手段であるがゆえに、ESD for 2030では、17のSDGsの達成を通して持続可能な世界をつくるために設けられた。ESD for 2030は、ESDはSDGsへの貢献を強め、特にSDG4-Education 2030 Agenda サポートするものとして、人類の生存と繁栄に寄与する学習の意義を一層重視するものである」と書かれている。このことから、ユネスコのなかでは、特にSDGsの達成に貢献するものとしてESDという考え方が強くなっているのがわかる。

## 2. Education 2030 プロジェクト (OECD Education 2030)

OECD Education 2030 では、不確実性を増していく現代社会の中で「個人およびすべての人々がよりよい未来を創造する(Well-being)」ために、どのように自らの人生や世界を歩んでいくかの指針となる「2030 年に向けた学習枠組み」を提案している。OECD Education 2030 は、学びの主体が学生・生徒・児童といった学校教育を想定しているため、大人の役割は、学生・生徒・児童の学びをサポートすることになっている (小村・金井、2018)。そうか、高等教育までが対象なら参考にならないな、と思いつつ詳細をよく見ると、この学習枠組みで使われる「エージェンシー」は、学びの主体のあり方として、注目すべき点ではなからうか。

### II. エージェンシー=行為主体性

ESD for 2030 では、その主体の多くは「学習者 (Learners)」と書かれており、その進め方は SDGs をベースとしたアジェンダを、5つの活動エリア (政策・教育訓練・教育者・若者・地域) で進めていこうというもので、GAP のフレームを踏襲している。また、フォーマル・ノンフォーマル・インフォーマル教育などを通して、「個人」の変容がどのように起こるかに焦点が当てられている。さらに、その個人の変容は、決意と勇気を伴うあるレベルの混乱、現実の複雑さについての知識を得て、行動に結びつくというプロセスが想定されている。一方、小村・金井 (2018) も指摘するように、OECD Education 2030 では、「エージェンシーとは、よりよい未来を創造するために責任感を持って社会参画をしていくことを意味する。そして、生徒がエージェンシーを発揮していくためには、家族や友人、教員や地域社会等、生徒をとりまく人たちとの互恵的な協力関係としての「共同エージェンシー」を発揮することが重要である」と指摘されている。このことから、他者と関係を結び社会参画する個人としての学びと、個人に SD の難しさへの理解を促しながら変容を促すという考え方という意味で、OECD Education 2030 と ESD for 2030 は異なるのである。

ちなみに、エージェンシーという概念は、1980 年代後半にブルーノ・ラトゥールらが提唱した「アクターネットワーク理論」のなかでも用いられている。アクターネットワーク理論では、人もモノも同位のアクターとする点がユニークで、近年は、ハイブリッド・コレクティブという概念で、主体は他の道具や制度と結びつくことではじめて、主体として振る舞うことが可能になるという (青山、2012)。例えば、自動運転機能がついている車に乗車したとき、運転していたのは車なのか？それとも自動運転機能なのか？といったように、運転の行為主体は人間だとみなしていたが、人工物が行為主体としての機能を発揮しているとも捉えられるのではないかと、といった考え方である。エージェンシーの捉え方についての議論は複雑で多岐にわたるため、紙幅の関係上省略するが、要するに、主体が、さまざまなアクターとネットワークのなかで「主体」になるという考え方が、「個」に還元されない ESD の在り方を問い直すものであると考えられるのではないかとということである。

おわりに

SDGs は、ESD を進めるうえで、SD を考える際に網羅すべき多様な分野を指し示してくれ

る。SDGs が普及したことで、環境教育に偏りがちな ESD の可能性を拡げてくれる。しかしながら、肝心の”E”の部分、どんな人々がどのように SD に関わっていくのか、のデザインについては、銀行型教育（パウロ・フレイレ、2011）のような知識習得型の学習モデルをベースとしているように思われる。そもそもの「個」の考え方を見直すことで、SDGs の解決の方策も、自ずと変わってくる。したがって、私の本稿における提案は、エージェンシーとしての学習をモデルとしている OECD Education 2030 の考え方を援用しながら、多様な分野をベースとした ESD の方法論を考えることで、ESD が結果的に SDGs に結びつくことになる、そのような考え方もいいのではないかということである。

#### 引用・参考文献

OECD(2018) THE FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS-Education 2030- (邦訳「OECD Education 2030 プロジェクトについて」)

UNESCO (2016, ED-2016/WS/28) Education 2030: Incheon Declaration and Framework for Action for the implementation of Sustainable Development Goal 4: Ensure inclusive and equitable quality education and promote lifelong learning for all

UNESCO (2019, 206 EX/6.II) SDG 4 - Education 2030: Part II, Education for Sustainable Development beyond 2019

小村俊平・金井達亮 (2018) これからの教育と SDGs－生徒がエージェンシーを発揮する学び－とは、学術の動向、23 (8).

青山征彦 (2012) エージェンシー概念の再検討: 人工物によるエージェンシーのデザインをめぐって. *Cognitive Studies*, 19 (2) , 164-174.

パウロ・フレイレ (2011) 「被抑圧の教育学 (翻訳: 三砂ちづる)」

## 市民活動実践者の立場から ESD と SDGs を考える

西谷 寛（海と空の約束プロジェクト）

### 1. はじめに

日常は、判りやすい環境教育、環境体験学習を進めるため、約 10 年前に自費出版した生物多様性や水の循環をテーマにした絵本「海と空の約束」を「紙芝居」にして環境教育で活用したり、地域の河川や海岸の保全活動や観察会を行っています。特に都市部の小中学校や保育園等で学校教育とコラボしたり、社会教育として活動することを中核にしています。

経歴が活動に大きく影響しているのでご紹介させていただきますが、兵庫県明石で生まれ育ち、大学で学んだ 4 年間で環境省に派遣された 2 年間だけ広島と東京で過ごしましたが、あとは明石と神戸を中心に暮らしています。

サラリーマン時代は 30 代前半までは神戸市の保健所部局で食品衛生や動物衛生、感染症対策の公衆衛生部門で担当者、係長として従事しその後、環境部門に異動し環境教育やごみ問題を担当し、環境省にも派遣され容器包装リサイクル法の 2005 年度の改正や啓発、広報を担当しました。

神戸に戻ってから生物多様性計画づくりや環境アセスメント業務を責任者として行いました。環境問題を仕事で担当するようになってから、土日のオフタイムは明石や神戸、淡路、加古川、姫路の森、川、海や農園でのフィールドワークのボランティアや学習会に通い続けました。仕事でもオフタイムでもエコロジカルな次世代の育成、生物多様性を保全できる地域社会を醸成し、ひいては地球環境保全や地域の生物多様性保全を図り持続可能な社会の実現に役立ちたいということにはベースにあったと思います。

この時期の後半に「ESD 推進ネットひょうご神戸」の活動に、賀川記念館の賀川督明館長（当時）に誘われて参画しました。ESD については仕事でもオフタイムでも聞くことが有りましたが、「ESD 推進ネットひょうご神戸」に参画し少しずつ気にして考えるようになりました。2013 年 3 月に、出版した絵本が「国連生物多様性の 10 年委員会」の推薦図書に選ばれた時から ESD についてもより意識するようになりました。特に「ESD スタディツアー」の受け入れを始めてから、受け入れた学生たちが何を感じ何を学びどう考えるか強く意識した教育を進めようと工夫もしました。

その後、大病をしてしばらく休職・療養したあと職場復帰し定時で帰宅できることが多いセクションに異動し、消費者相談、消費者教育を神戸市生活情報センターというところで担当しましたが、若干、身体的に不自由も不安も有ったので 6 年前に定年退職まで少し残して早期退職して現在に至っています。

仕事で関わった全ての分野をテーマにして社会教育の場で生かしたいと考え、公衆衛生、食品衛生、動物衛生、環境教育、防災教育、消費者教育の分野を活動のテーマにしています。3 か月に 1 回のペースで JICA 関西で活動の概要を説明する機会があるので SDGs のことも知ったのは割と早い時期でしたが、強く意識し始めたのは 2 年前の「ESD 実践研究 2018」の企画に関わ

ってからです。

「SDGs」というカラフルなロゴと判りやすい 17 のゴールを様々な場所で見かけたりラジオでも聞きます。ESD と異なり SDGs は短期間で、内容、深度は別として一般市民社会に素早く広がり認知を得ています。

## 2. ESD と SDGs に関する最近の印象と活動との関係

### (1)ESD について

体調に注意しながら身近な環境保全活動や学習会、各種イベントを通じて、子ども達や一般市民、そしてこれまで環境問題に関して無関心だった層に、判りやすい心に響く話題提供や環境教育、防災教育を進めています。「ESD」としての教育になる様に務めています。つまり環境教育をテーマにした市民活動の実践者にとっては「ESD」とは、活動そのものであると考えています。

### (2)SDGs について

2020 年になって明石市内で全世帯に配布されている「広報あかし」で SDGs に関する広報が続いていて驚きながら、多少は期待する毎日を送っています。

発行年 No	特集 タイトル	概要	頁
2018 年 8 月 No1266	特集世界が目指す目標 SDGs ×明石がつくる未来	SDGs の説明と明石が進める 取り組み	1~3 頁
2020 年 1 月 No1301	地球にもやさしい明石市へ SDGs 未来安心都市明石	環境編 海陸～気候変動～ みんなで一緒	1~3 頁
2020 年 2 月 No1303	次の 10 年に向けて動き出しまし た。SDGs 未来安心都市明石	明石市の目標×SDGs 市総合計画	1~3 頁

表 SDGs 特集 (広報あかし)

カラフルでイメージしやすいロゴ、言葉や文字にしても伝わりやすいイメージで認知が進んでいるように見えるし、電車や会議の場で SDGs のバッジを見かけることもあります。事業者のホームページやチラシで見かけることもあります。実際、私が自分の活動を企画したり進めるために、行政や地域のまちづくり協議会の会議や打ち合わせの場でも SDGs が共通の言葉として使えることがあります。

ESD は未だに、行政やまちづくりの会議では理解していただけません。しかし、当初からよく言われていましたが、SDGs の成果が問われるのはこれからであり、私も検証する視点で自分自身の活動や行政や事業者、他セクターの活動を見て行きたいと思います。

もう少し具体的に言うと、我々も含めて市民県民レベルでは、SDGs がどんなものかは大体でイメージを掴んでいても実際に具体的に何をどうするのかは実践したり、評価、検証できるレベルでは無いことが多いと思います。すべての SDGs を理解している人は少ないと考えます。

事業者、行政レベルでも、例えば SDG1 (貧困)、SDG2 (飢餓) 等は、わが国では余り関係ない位に受け取って対象にも考えて居ない方の存在を聞きますが、17 の目標と 169 のターゲット

やローカル指標をしっかりと読み込むと、貧困層や脆弱層に対しての十分な保護の達成や食品安全保障や持続可能な農業の促進等我々も解決すべき緊要かつ困難な課題が山のようにあることに気がつきます。

明石市の広報紙の特集でも、現段階では、耳障りの良いゴールを提示して一見積極的に取り組んでいるように見えたり先進的な取り組みをしているようにアピールできますが、今後、いかに実施結果を評価し比較し、現状との課題をあぶり出しながらより高い目標に積み上げて、SDGsの実践を具体化していくことが極めて難しい課題だと考えます。

市民県民は、自分たちの活動や暮らしも SDGs を視野に入れて当事者として展開していくことは重要です。また、SDGs が社会的に免罪符になることにならない様にしっかりと学習を積み上げて準備する必要があると思います。

### 3. 最後に

市民活動の実践者としての一市民として意見や印象を述べました。勉強不足で熟度も低いですが、ただ、研究者も教師も企業人も NPO/NGO としている方も、誰もが市民、生活者としての顔や立場を持ってられるので、その立場からも SDGs や ESD も考えて頂きたいと願っています。何故なら、立場が違えば特に SDGs は指標の見方も課題も評価も大きく異なってくるのではと考えるからです。どこかで同じ視点で見ている軸が必要ではと感ずるからです。私自身も「ESD」や「SDGs」を考察したり活動する場合は、必ず「自分の立場で考えること」にしています。それは自分が病気になるまでは知識としてはある程度知っていましたが実際に闘病生活になると、知識だけでは何ともならないことばかりであることに気づきました。「教育」を、「知識」だけで終わらせず「行動」にまで繋げ継続して行くためには「自分の立場で考える」という習慣が必要だと考えます。また特に研究者の方には、科学的、技術的な助言や情報提供をお願いしたいと思います。絶対に科学的な助言は必要だと思います。

## 仮説と実践～それぞれの立場でより良い社会にするための努力～

西谷 真弓（一般社団法人おいしい防災塾）

子育てに関わるボランティア経験を経て、地域密着の子供支援団体を設立した。

子供が暮らしやすい街にするにはどうすれば良いか？という課題に、「子供を守る為には、街づくりをしなくては真の意味で子供支援にはならない」という考えのもと、子供と異世代を繋げ、子供を見守る目を増やす事で子供支援が実現できるのでは？との仮説を立てて実践してきた。私の活動はすべて経験に基づき実証してきた事だと言える。具体的には、商店主と子供、親子を繋げる為のハロウィンパレード、農家さんと親子を繋げる為の農業体験、乳幼児と小学生を繋ぐ放課後くらぶ等である。こうした活動が認められ神戸市民福祉顕彰をはじめ、他の賞も賜った。

この地域密着子供支援の活動の原点は、阪神淡路大震災だった。阪神淡路大震災の避難所では子供達の笑顔が無かった。傍らで騒いでいる子供に向かって周りの大人が罵声を浴びせ、保護者と争いになる場面を目撃。災害時の避難所では子供を守る大人が居なくなる。子供は自分自身で、この状況を打破しなくてはいけないということを痛感した。

「子供を笑顔にしたい！」その為にはどうすれば？「ここにお菓子があれば笑顔にできる！」と、25年前、20代だった私が仮説を立て実践をしたのが、移動駄菓子屋だった。軽トラックを購入し、公園や路地、仮設住宅、子供が集まる場所に駄菓子を積み込んだ軽トラックで、子供達を待つ。覇気のない子供達がお菓子を求めて、移動駄菓子屋に集い、お菓子を選ぶうちに元気になる姿を見る事で私自身も癒された。復興し、お菓子を容易に買えるようになり移動駄菓子屋の活動は停止したが、この仮説と実践は、自らの貴重な体験だったと自負している。

その後、子供支援のボランティア団体を発足した。発足までに子供に関わるボランティアを多々経験したが、仮説を立てるまでには至らなかった。数年後、ようやく仮説を立てる事ができ、今も実践している。そんな中、南海トラフ大地震が起これとの情報が耳に入る。地域の保護者、知人友人の災害に対する備蓄等の備えが、十分ではない事に愕然とした。「こんなことで良いのか!」「また同じ事を繰り返すのか!」「子供達はまた笑顔をなくすのか!」「どうしたら子供達を守れるのか?」

この課題に仮説を見出し、防災の事業を法人化したのが一般社団法人おいしい防災塾である。おいしい防災塾では、「怖くない防災」を子供達に伝えたいとの思いから、お菓子を使っている。おいしい防災塾の課題は、「どうしたら、災害に対してアンテナを張り、備えようという気持ちになれるのか?」「怖くない防災を伝えていくには?」「その時だけではない持続性のある防災とは?」などである。この課題解決の為に仮説を立てたのがおいしい防災塾のお菓子を使った防災講座である。お菓子でポシェット（バッグ）を作り、持ち帰る事で防災が持続的なものになると考えている。

また、お菓子の賞味期限の日には、子供達には食べる楽しみがある。お菓子には3つの役割を持たせている。

### 1 非常食の代わり

## 2 笑顔のお守り

## 3 感謝の心を育む

これらは、阪神淡路大震災を経験した母親の願い、子供達に伝えていきたい思いである。

この活動を学生が手伝ってくれる事でESDが実現できると確信している。持続可能な開発のための教育とは、子供達が納得し受け入れる事業でないといけない。文部科学省はESDについて次のような説明をしている。

「今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。つまり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。」

さらに、ESDの実施には、特に次の2つの観点が必要であるという。

○人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと

○他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと

この観点はおいしい防災塾と共通している。おいしい防災塾の参加者は小学生が大半である。その小学生を大学生が手伝う事で、繋がりを持つことができる。小学生と大学生の年の差は10才もない。同じ世代の日本を背負う小学生と大学生が関わり、繋がる事で持続可能な社会づくりの担い手となるのではないだろうか、という仮説を立て実践している。ESD 実現の為には学生と異世代を繋げる事業でないといけない。その為には相互にとって、やりがいのあるものでないといけない。

私が体験してきたボランティアは、他人の為に尽力する事で自身の生きがいや、学びに繋がり、喜びを得た。ボランティアとは自分の為だという人が多かった。だが、昨今では学生なら容易にボランティアの機会を持つことができる。教育機関を通して活動するボランティアもあれば、先生方が引率をしてくれるボランティアもある。多くの情報は学校から提供される。この多々ある機会を、生きがい、やりがいに繋げる活動として学生が認識するためには何が必要だろうか？

ボランティア体験の機会はとても重要だと思う。しかし、次のステップの、自らが活動をしようという思いに繋げるには、活動そのものに魅力がなければいけない。学生にとっては、「やりがい」「達成感」「関わっている団体の交流」、あるいは経済的な事も重要であろう。そのどれをも満たしていないと、受け身の一度きりの体験だけで終わってしまう。

「魅力ある活動とは何か？」「より良い活動の為に団体が出来た事は何か？」この視点を持ちながら活動をする事が、魅力ある活動となるのではないか。この事からESD登録団体の役割の重さを感じている。ESDでは50人強の学生が、おいしい防災塾の活動に参画している。学生参画の際、おいしい防災塾が心掛けている事は、ESDとの関連性を話すことである。まず、自己紹介で活動者全員がコミュニケーションを取り、活動の要点を話す。「何のためのESDか」ということを認識後、活動に参画する事で次に繋がるのではないかという仮説を立てた上で実践している。その結果、1人の学生が今も継続して活動に参画している。この数字は何を意味するの

か？この課題は ESD 登録している間、ずっと持ち続け、仮説と実践を繰り返したいと思う。

次に SDGs について。おいしい防災塾は関西 SDGs プラットホームに団体登録している。ESD に共鳴し、ESD の目標が共通しているという事が自分なりに理解ができたから SDGs にも関わる決心をした。SDGs は ESD の延長線上にあるゴールと認識している。学生が社会人になり、ESD の学びを活用し SDGs を実現する主役になっていくのであろう。

SDGs の実現の為に、ゴールとなる目標を実現する為の人材が必要である。社会人になる前の学生の中に、多様な活動を ESD で体験し、その礎の元で自分に合う、自らが発信したくなる活動を選ぶ。学生は学生の立場で、団体は団体の立場で、それぞれがそれぞれの立場で、今よりも良い社会にする為に努力する。この事が ESD と SDGs 実現の為に必要だと私は認識している。これからも仮説と実践を繰り返し実証していきたい。

## ESD と SDGs との関係性とは

山村 けい子（兵庫大学短期大学部）

まず、地球サミットで採択された「アジェンダ 21」の第 36 章の 3 節において、「教育は持続可能な開発を推進し、環境と開発の問題に対処する市民の能力を高めるうえで不可欠」であり、「教育はまた、持続可能な開発にそった環境及び倫理上の意識、価値と態度、そして技法と行動様式を達成するために不可欠である」<sup>1)</sup>とされている。つまり始まりは、「環境教育」、「開発教育」であるということは周知のとおりである。その後、「テサロニキ宣言」においては「持続可能性という概念は、環境だけではなく、貧困、人口、健康、食料の確保、民主主義、人権、平和をも含むものである。最終的には、持続可能性は道徳的・倫理的規範であり、そこには尊重すべき文化的多様性や伝統的知識が内在している」<sup>2)</sup>とされている。

また、ESD 推進ネットひょうご神戸においては、「ESD とは」として詳しく説明がされている。その中で「初等教育の教養的な柱というだけでなく、」と説明をされているが、この「初等教育」については、2000 年の MDGs（ミレニアム開発目標）において、貧困問題と飢餓の撲滅など、2015 年までに達成すべき 8 つの目標を掲げてある中で、「MDGs2：すべての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする」と「初等教育」を限定した目標が掲げられている。就学前教育に長年携わってきたのでこの点に関しては、やはり注目をせざるをえない。

しかし、現在の「SDGs（持続可能な開発目標）」に関しては、4.2 の「2030 年までに、全ての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする」とある。ここで初めて「就学前教育」が明記された。乳幼児の死亡率の削減に関する目標は、MDGs4 でも掲げられていた。これは、教育ということとは少し違う課題と捉えている。また、初等教育を受けるまでのレディネスのみを目的にするのでもないと考えられる。現在、関わっているバングラデシュにおいても就学前教育は、随分普及はしてきた。実際に現地での調査においても男女の差もあまりなく、教育を受けていたが、それでも日本や欧米諸国に比べるとまだ普及率は低い。

2000 年から採択された MDGs の 10 年間を終え、新たに SDGs の 2030 年までの限定的な目標の 1 つの SDGs4 の「質の高い」という点においては、日本や世界においても重要なポイントになると考えている。2019 年から 4 回目に改定された保育所保育指針、幼稚園教育要領が実施されている。改定のポイントとして「幼児教育」が大きく位置づけられた。「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10 の姿』」が明記され、10 の姿の中に「道徳性・規範意識の芽生え」という項目がある。つまり持続可能性という概念にある「道徳的・倫理的規範」は、「就学前教育」の子ども達に「育ってほしい姿」としても掲げられているのである。

MDGs も SDGs もそれぞれに目標が限定されており、それぞれ「地球規模の課題」ではあるが、しかし、それは時代の流れのように「内容」も変化している。本の題名にもなっているが、「MDGs 時代」、「SDGs 時代」といえるのではないだろうか。

そう考えると SDGs 時代には、「教育」は目標 4 のカテゴリーに入り、例えば、目標 1 の貧困や目標 11 のまちづくり等と並んでも少しは、わかるような気がする。

しかし、「ESD（持続可能な開発のための教育）」それ自体の「概念」は変わらない。「初等教育」であろうと「就学前教育」或いは、「高等教育」であろうと、いつの時代であっても変わらないのではないだろうか。

近年では、VUCA の時代、「Volatility（変動）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）」と言われている。4 つの言葉の頭文字をとって造られた言葉で社会経済の中で使われている。

Bill Emmott（2018）は、「経営のトップがどの時代でもしなくてはいけない重要なことは、自分たちの各計画フェーズにおいて変動性、不確実性、複雑性、そして曖昧性は、一番何に起因しているのかを明確に把握することで、その後はそのような課題に直面したときにレジリエンス、しなやかな復元力を持てるように会社のポジショニングをし、このような変化から発生するチャンスを活用していくようにすることである」<sup>3)</sup>と言っている。企業の話ではあるが、「教育」も「概念」さえしっかりとしていれば、色々な課題に直面したときに「柔軟に」且つ「しなやかな」復元力で「変化から発生するチャンスを活用していくようになる」のではないだろうか。

改めて「教育」についての役割を考えることが、ESD にとって重要であり、「SDGs 時代」の細分化されたターゲットを自分事として考え解決に導く「チャンス」を生み出すのではないだろうか。

「時代」とは、移ろい変わり、変化するものである。

SDGs、VUCA 時代ともいわれる時代に振り回されることなく、「教育とはなにか」「どのような役割をするのか」の議論を重ね、探究し、乳幼児、青少年、障がい者、高齢者等の区別なく多様な人々と共に、今、生きている時代を再認識し、「未来への希望」を常に見据え、繋げていくこと重要である。

そして最後に何よりも私自身が「learning to transform oneself and society」し続けたい。

#### <引用文献>

- 1)、2) 田中治彦他（2015）『多文化共生社会における ESD・市民教育』（株）ぎょうせい p93
- 3) 就実大学経営学部（2019）『VUCA 世界における日本の選択』吉備人出版 p 10

#### <参考文献>

- 田中治彦他（2015）『多文化共生社会における ESD・市民教育』（株）ぎょうせい  
北村友人他（2019）『SDGs 時代の教育 すべての人に質の高い学びの機会を』学文社

## ■執筆者一覧

池田 拓也	灘中学校・高等学校
泉 史織	神戸大学国際人間科学部
稲原 美苗	神戸大学
小倉 未来	神戸大学国際人間科学部
鴨谷 真	神戸大学 ESD 総合コーディネーター
木下 栞	神戸大学国際人間科学部
清野 未恵子	神戸大学・ESD 推進ネットひょうご神戸事務局長
後藤 聡美	神戸大学大学院人間発達環境学研究科
高田 知紀	神戸市立工業高等専門学校・ESD 推進ネットひょうご神戸副事務局長
武田 義明	ESD 推進ネットひょうご神戸副代表
津田 英二	神戸大学
堤 拓也	神戸大学大学院人間発達環境学研究科
西谷 寛	海と空の約束プロジェクト・ESD 推進ネットひょうご神戸副代表
西谷 真弓	一般社団法人おいしい防災塾
野崎 隆一	ESD 推進ネットひょうご神戸代表・神戸まちづくり研究所
福井 良子	特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構ジェイアーン
福田 百	神戸大学大学院人間発達環境学研究科
松岡 広路	神戸大学
宮本 貴生	神戸大学大学院理学研究科
八木 純二	公益財団法人 PHD 協会
山村 けい子	兵庫大学短期大学部
渡邊 一真	ESD ボランティアぼらぼん代表・京都府社会福祉協議会
渡邊 久美子	神戸大学法学部

## ■編集スタッフ

後藤 聡美 / 鴨谷 真 / 松岡 広路

おわりに ～ESD を未来に引き継ぐ～

武田義明 (ESD 推進ネットひょうご神戸副代表)

文科省によると「ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育む教育」と定義している。また、ESD で育みたい力として、1.持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）、2.体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方）、3.代替案の思考力（批判力）、4.データや情報の分析能力、5.コミュニケーション能力、6.リーダーシップの向上をあげている（文部科学省 HP）。しかし、ESD ということばは、まだ、社会にそれほど浸透していないように思える。

私の関係している里山保全や自然保護団体では SD の部分については、理解し、それを目指して活動しているが、E については、弱いような気がする。それぞれのリーダー達は 1～6 の能力は持っているものの、それが会員や次世代に引き継がれているかという疑問である。会員はリーダーに任せておけば、会の活動や運営がうまくいくと思っており、積極的に運営に関わろうとする人が少ない。このことは会の継続性や次世代への引継が難しいことを示している。特にリーダーが高齢の場合は、次のリーダーを育てることが喫緊の課題となっている。その他に、若い新規会員の獲得が難しくなっているのも問題である。

自然関係の団体に関わってくれる人材を育成するためには、長期的な観点で考えて行く必要がある。そこで、子どもたちに自然にふれあえる機会を多く作る必要がある。少なくとも自然体験があれば、将来、自然保護や里山管理の担い手となってくれる可能性がある。一般の人に興味を持ってもらうためには、それぞれの団体の活動の内容を広く知らせる必要があるが、その広報活動は単独では難しいことがある。しかし、各団体が連携すれば効果的にできるものと思われる。

そのためには、各団体がどこでどのような活動を行っているかをお互いを知ることが必要である。兵庫県では人と自然の博物館が「共生の森」のイベントを開催し、里山管理団体、自然保護団体、環境教育団体など自然に二関係した多くの団体が研究発表や活動報告を行っていて、それぞれの団体の活動内容を知ることができる。また、川西市では生物多様性ふるさと川西戦略シンポジウムを開催し、川西市内で活動している里山管理団体や自然保護団体の交流を図っている。さらに、大阪では大阪市立自然史博物館が大阪自然史フェスティバルを毎年開催していて、大阪府近隣の自然保護や研究団体などがブースを出展しており、団体間の交流が図られている。しかし、団体同士で連携して活動やイベントを行うことは希である。一方で、これらの団体に参加している個人も 1 つの団体にしか加入していない人もいるが、いくつかの団体に所属している人もいて、そこでは団体間の直接的な交流はなくても間接的に連携しているといえる。

これらの交流イベントを主催しているのは博物館や行政など公的機関が多い。この様に公的機関の支援があると小さな団体でも他団体と交流を図ることができ、さらに、会員外にも活動の内容を知ってもらえるのではないかと思われる。

ESD を未来に引き継ぐというよりは、すでに、その概念に沿って多くの人や団体が活動しているので、継続していくことが重要と思われる。そのためには特に、E の部分の強化を図ることが必要であると考えます。



## ESD 実践研究 2019

---

2020年7月1日発行

編集・発行 ESD 推進ネットひょうご神戸 (RCE 兵庫-神戸)  
神戸大学大学院人間発達環境学研究科  
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11  
Tel: 078(803)7970 / Fax: 078(803)7971  
E-mail: rcehyogokobe@port.kobe-u.ac.jp

---

# Studies in ESD Practices

---

RCE Hyogo-Kobe

Kobe University Action Research Center for Human and Community Development